

第5章 第10次調査の記録

(酵素科学研究センター棟新営地の発掘調査)

第1節 調査の概要

1 調査にいたる経緯

1993年（平成5年）には酵素科学研究センターの建設が決定された。それに先立つ埋蔵文化財の発掘調査を本学の埋蔵文化財調査室が担当することになり、関係各方面との協議など必要な準備を開始した。調査担当者は室長の東潮であり、実地の調査員は北條芳隆である。また今回の調査については、施設部技術補佐員として同年4月に採用された北條ゆうこが調査業務の一部を分担することになった。地籍は徳島市蔵本町3丁目18番地の15、調査面積は623m²である。調査期間は1993年5月26日から9月30日までの約4ヶ月間とである（図87）。

2 調査組織

調査組織は次のとおりである。

徳島大学埋蔵文化財調査委員会

委員長	武田 克之（徳島大学長）
委 員	丸山 幸彦（総合科学部長）
同	石躍 健央（教養部教授）
同	東 潮（総合科学部助教授）
同	齊藤 隆雄（医学部長）
同	河田 照茂（歯学部長）
同	寺田 弘（薬学部長）
同	河野 清（工学部長）
同	後藤 健次（附属図書館長）
同	井形 高明（医学部附属病院長）
同	西野 瑞穂（歯学部附属病院長）
同	磯部 淳一（医療技術短期大学部長）
同	新谷 義廣（工業短期大学部長）
同	松本 道雄（事務局長）
同	黒田 定男（庶務部長）
同	伊藤 良昭（経理部長）
同	山岐 紀一（施設部長）
同	檜澤 一夫（学生部長）
同	湯口 唯男（学生部次長）

庶務担当 松本喜代司（施設部企画課長）

同 奥野 勝（施設部企画課企画係長）
同 沖野 紘子（施設部企画課企画係主任）

埋蔵文化財調査室

室長・調査担当者 東 潮（総合科学部助教授）
調査員 北條 芳隆（医学部助手）
調査補助員 北條ゆうこ（施設部技術補佐員）

施工業者 株式会社熊谷組（現場代理人 吉田 剛）・コスモ土木株式会社

3 調査の目的と方法

行政的にはあくまでも徳島大学酵素科学研究センター棟新嘗にともなう埋蔵文化財発掘調査であるが、それを考古学的な立場で読み替えた場合、今回の調査目的としては次のような諸点が掲げられた。

調査予定地は動物実験施設の東側に隣接する場所である。そのため、当該地区での第5次調査（昭和60年度実施）との対応関係をふまえ、遺跡内の旧地形を把握することが第1の目的として設定された。先の調査では、西側から流れ込む弥生時代の旧河道が調査区内で鋭角に屈曲し北流する状況が判明しており、河道と微高地とが複雑に交錯する地形的状況が推定されたからである。また旧河道は層位ごとに様相が異なるようで、弥生時代前期と後期とでは流路自体の状況も大幅に変化したらしい。地形の復元作業と同時に、その変化をたどる作業も重要な課題として残されており、その際の有効な手がかりを得たいところであった。今回の調査地はまた第9次調査（医療技術短期大学校舎増築）地点の北側に隣接する場所もある。第4章で報告したとおり、この調査でも弥生時代前期の流路が発見されており、その延長部分が今回の調査地で確認される可能性も高い。こうした既存の調査成果との対応関係を解明すると同時に、上述の目的への接近が望まれた。

遺存する遺構面としては、従来の調査成果をふまえ3ないし4面が想定された。特に今回は黒褐色土層中における中世・古代の各時代の層位識別が可能か否かの再確認が必要であった。このような各時代

の遺構と層位の対応関係を詳細に把握すること、この点を第2の目的として設定した。

なお前回の第9次調査でも弥生期の水田跡は発見されず、流路の検出に終わった。この積年の課題は、そのまま今回の調査へともちこされた。問題解明への糸口が欲しいところであった。

調査の方法はグリッド調査とし、調査区全体を3m方眼で区画し、北西優位でグリッド名を与えた。グリッドの座標は任意に設定してある。グリッド軸は磁北から8度東へ振れている。標高は東京湾標準潮位を基準とした。掘削方法は明治期以降の造成土および建物基礎の一部については重機掘削、それ以下を人力掘削とした。

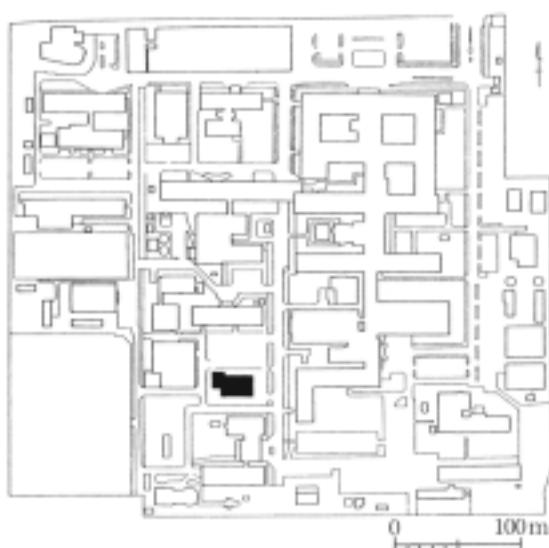


図87 調査地の位置

4 調査経過

5月26日、重機掘削を開始。造成土の堆積は予想外に薄く、北側においては40～50cm程度の掘削で包含層に至ることが判明した。28日に重機掘削終了。6月1日、グリッドの設置を開始。3日から人力掘削に入る。水田耕作土直下の黒色土中より時期幅のある遺物が多数出土。8日、中近世のものと思われる溝を検出、この面を第1遺構面とする。同14日、第1遺構面上面の写真撮影を実施。24日までに記録作業と平行して遺構の掘り下げと搅乱土の除去および遺物の取り上げを行い第1遺構面の調査を終了し、翌25日には写真撮影を実施した。

6月28日より第2遺構面検出作業に入り、黒色土層の掘り下げを開始した。黄褐色シルトの漸移層まで包含層を約10cm掘り下げる。7月1日、古墳時代中期の住居跡を検出。同7日には周辺をさらに数cm下げて遺構検出作業を続行し、柱穴列・土坑・溝・木棺墓を確認する。同9日、第2遺構面検出状況の全体写真を撮影したのち、遺構掘り下げに入る。この間20日から23日までは東室長担当授業の考古学実習が行われ、30数名の受講生が調査に参加。なお検出された遺構の掘り下げは記録作業と共に漸次進められ、7月30日の近世木棺墓の完掘をもって終了した。木棺墓からは各種副葬品が出土。全体写真は調査区を東西に分割して29日と8月3日に撮影。なお本年は冷夏であると再三にわたって報道されてきたが、確かに雨天の日が多く、ここまで調査を終えるまでに2・3週間の遅れがでた。

8月4日以降は黄褐色シルト層の掘削に入る。第3遺構面を探るが明瞭な遺構はつかめず、単独で弥生時代前期後葉の土器を複数検出する。若干の遺構検出の後、下層の暗褐色粗砂層まで下がり、この上面において杭列跡とおぼしき柱痕・立石・溝等を確認。この層位を第3遺構面とする。9月1日までに当遺構面の作業を終える。なお8月の下旬には本部施設部企画課から、調査の早期終了を強く要望された。次の常三島遺跡（工学部地区）で予定されている埋蔵文化財調査に影響が出るということが要望の趣旨であった。調査の現状を説明しつつ協議を重ねた結果、9月下旬までに調査を完了することと、翌日からただちに次の調査を開始することで了解をえた。

以後9月上旬からは第4遺構面検出に移り、かねてより試掘トレーニング内で確認済みの弥生時代前期中葉に属する用水路を追究する。併せて水田の有無を確認すべく周囲の掘削を実施。この間に大阪府文化財センターの井上智博氏に来訪いただき、前期水田調査の経験者としての助言を仰いだ。また徳島文理大学の日下雅義氏、本学総合科学部の平井松午氏には歴史地理学の立場からの所見を賜るとともに、皇學館大学の外山秀三氏を紹介いただき、土壤のプラントオパール分析を早急に実施いただけるはこびとなつた。これらの方々の助言や分析結果を総合す

ると、当調査地は微高地状の地形を形成しており、水田域にあたる可能性は低いことが判明。用水路の流路が向かう北東方向に、その存在を推定するにとどまった。なお用水路を埋め第4遺構面を覆う黄褐色シルト層が、細かなラミナの堆積層であり、1回の洪水による堆積と判断してさしつかえないとの所見を各氏からえられた。16日、新たに北側からも、先の用水路に平行して東に向かう別の用水路を検出した。この水路は検出層位からみると、先のものよりやや古い可能性も指摘される。



図88 調査風景

調査区全体としては縄文時代晚期相当の暗褐色粘土層を掘り下げ、遺構の有無を確認。20日には記者発表を兼ねて学内関係者及び一般教職員向けに現地説明会を行い約70名の参加を得た。22日、大学本部と再度協議のうえ調査期間を30日まで延期することを決定。25日、用水路の完掘。27日には清掃後調査区全体の写真撮影を実施。28・29日の両日で残りの記録作業を終了し、30日、現場機材を撤収後常三島地区へ搬入し、調査を完了した。

第2節 調査の記録

1 基本層序と遺構の概要

今回の調査の結果、検出された遺構の主要なものを年代の古いものから列挙すると、次のようになる。

弥生時代前期前葉の溝	3
弥生時代前期後葉の杭列	1
弥生時代前期後葉の立石	2
弥生時代前期後葉の土坑	4
弥生時代中期後半の溝	1
弥生時代中期後半の土坑	3
古墳時代中期の住居跡	1
古墳時代中期の井戸	3
近世の溝	6

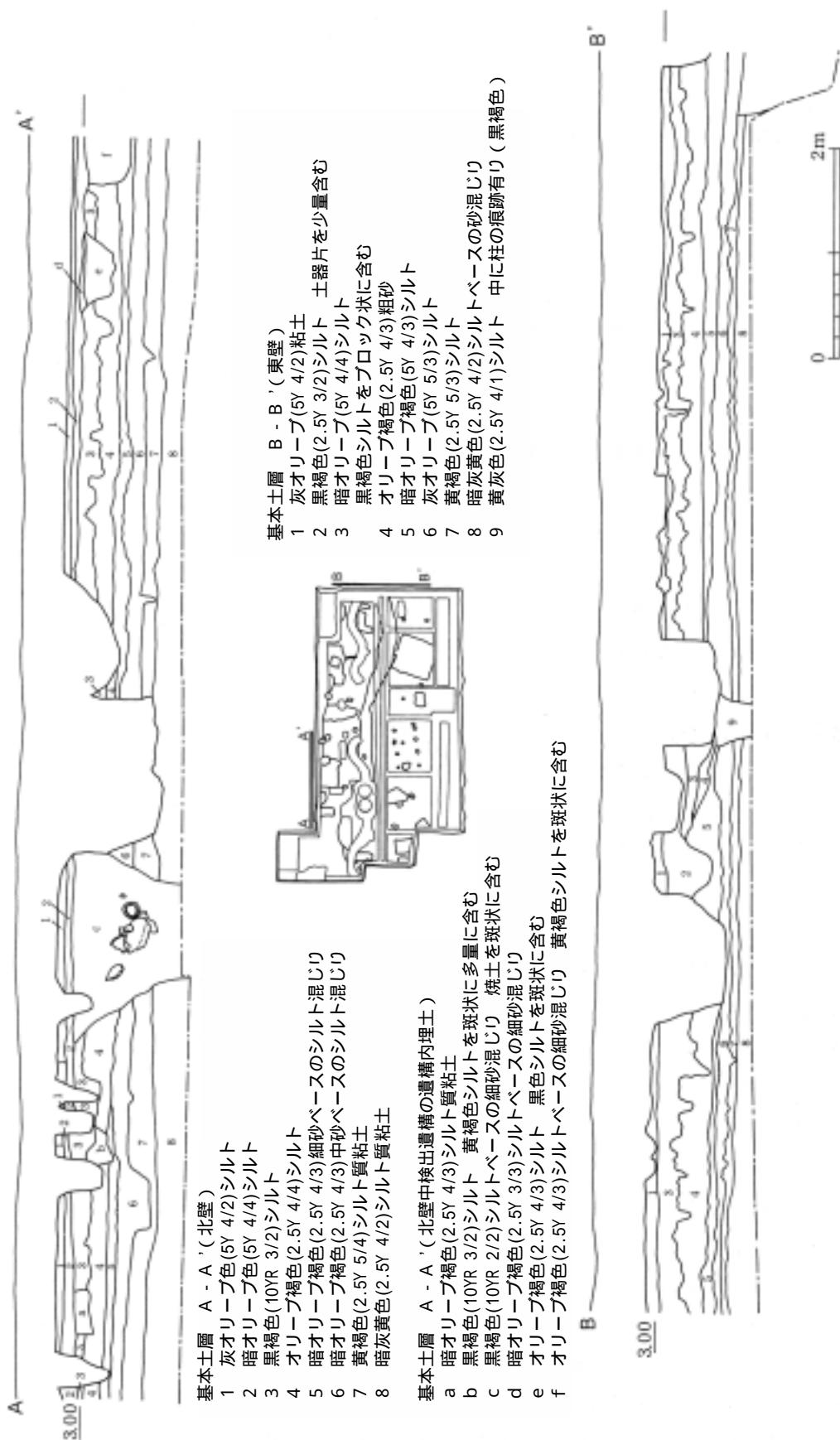
また出土遺物の数量は次のとおりである。

土器類（弥生土器・土師器・須恵器ほか）	コンテナ 45 箱分
木器類（漆製品をふくむ）	コンテナ 1 箱分
石器類・鉄器類	コンテナ 1 箱分

調査地の堆積状況を示したものが図89・90である。現在の地表面は海拔 3.5m であるが、地下 60cm までは明治時代以降の造成土で、その下の 2 層以下が近世以前の地層である。基本層序は第9次調査と同じであるが、先の調査時には黄褐色シルト層と認識したものを 3 層と 4 層とに区分し、その下方に新たに 5 層を加えた点が新たな知見である。ただしこれら 3 層から 5 層までの区分が可能な場所は限定されており、調査地点によっては今後とも黄褐色シルト層として大づかみに把握する方が適当な場合もありうるものと思われる。今回の調査目的のひとつとした 2 層の分層についてはなしえなかった。

今回の調査では遺構面数を 4 枚と把握し、第 1 遺構面を近世、第 2 遺構面を弥生時代中期以降中世までの各時代の複合、第 3 遺構面を弥生時代前期後葉、第 4 遺構面を弥生時代前期前葉として処理した。なお第 2 遺構面で検出された遺構・遺物の主体は弥生時代中期後半と古墳時代中期のものであり、時間軸でみた場合の偏在性が顕著である。特に中世の遺構・遺物をほとんどみないことは注意すべき現象であろう。推測の域をでるものではないが、近世の水田開発によって大規模な造成が広範囲に及び、中世の包含層はその時点で削平された可能性が高いのではないか。1 層と 2 層との間にみられる平坦な不整合面は、こうしたことを物語っているように思われる。

この図から調査地における地形的变化の概要を推定してみると次のようになる。約 2200 年前の弥生時代前期前葉には地表面が海拔 2.2m 前後であった。以後、数度の洪水をうけた結果、最終的には 80



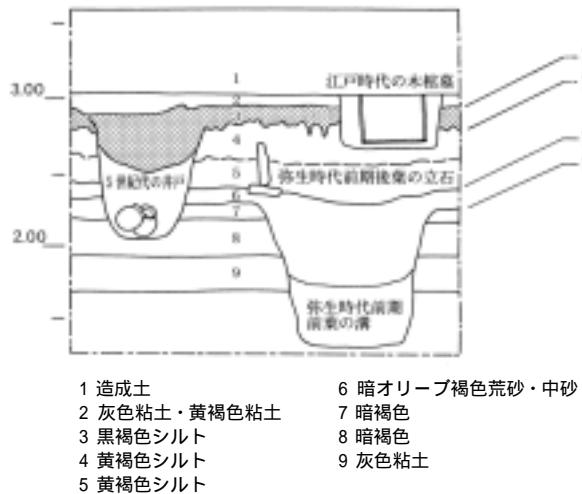


図90 基本層序と遺構

時代前期前葉の灌漑用水路を完全に埋めている。

一方、3層が堆積した以後は大規模な洪水に見舞われる頻度が大幅に低下したものと考えられる。先の洪水砂が幾重にも厚く堆積した結果、調査地周辺の一帯は微高地となり、洪水からは免れる地形となつたのであろうか。この間に鮎喰川本流の流路変更が生じた可能性もある。

弥生時代中期以降近世直前までの包含層は2層であるが、この土層が独立した堆積層とはみなしがたく、本層位は3層の土壤化が度重なる搅乱とともに進行した範囲を示すものと解釈される。そのためごく単純化していえば、弥生時代前期後葉以後は、顕著な堆積を促すような要因が生じなかつたと理解されうる状況である。つまり調査地点における地形の大枠は弥生時代前期後葉までに形成されたとみて差し支えない。その後近世になって水田開発にともなう大規模な削平を受け、一帯は平坦に均されたのち、やがて明治期における旧陸軍の接收・大規模造成を被り、現在の地表面が形成されるにいたつた。

調査地における地形の変遷過程は概略以上のようなものと理解される。

2 弥生時代の遺構

(1) 前期前葉の溝

今回の調査では当該時期に属する3本の溝が検出された。平面的な位置関係は図91に示したとおりである。ともに調査区の南西側から東北東側へと平行して延び、途中で東へと鈍く屈曲した後は調査区の東側へと直線的に抜けている。南側の溝1は、上面での幅が標準的な場所で計測して1.2m、平均的な深さ約1m、底の幅70cmの規模をもち、断面形は逆台形を呈する。埋土の状況をみると、底面から上方には35cmの厚さで、砂と粘土が互層状をなす状況が認められた(図92上段)。流水の形跡がこのように明瞭であり、先に述べた断面形の特徴がどの場所でも一定していたため、この遺構は人為的に開削された水路であり、用途は水田の灌漑用水路であろうと認定した。水は周囲の地形的状況をみれば明らかのように、西から東へと流れていたことが確実視されるが、ちなみに調査区内における東西両端の床面の高低差を計測すると12cmで、緩やかな勾配である。調査区内では水口や堰などの付属的な構造物は検出されなかった。護岸施設の状況や土手の有無についての追求も行ったが、それらの痕跡を確認することもできなかつた。なお細部についての所見であるが、断面形を細かく観察すると、どの箇所でも上流から下流を見た場合の左岸側(北側)の傾斜が右岸側(南側)よりきつく、床面もわずかに低

cm程度の堆積層に覆われることとなり、江戸時代の地表面は海拔3m程度までに上昇した。ただしいつの時代にも洪水が頻発したわけではなく、本地点の場合、洪水の影響をまともに受けた時期は、弥生時代前期後葉のごく限定された期間であったと推定される。3層・4層・5層はいずれも洪水によって押し流されてきた砂礫層、および洪水後の滞留水が引くまでの間に沈殿したものと推定される砂層およびシルト層である。このうちもっとも古い5層は比較的大規模な洪水によるものであったと思われ、弥生

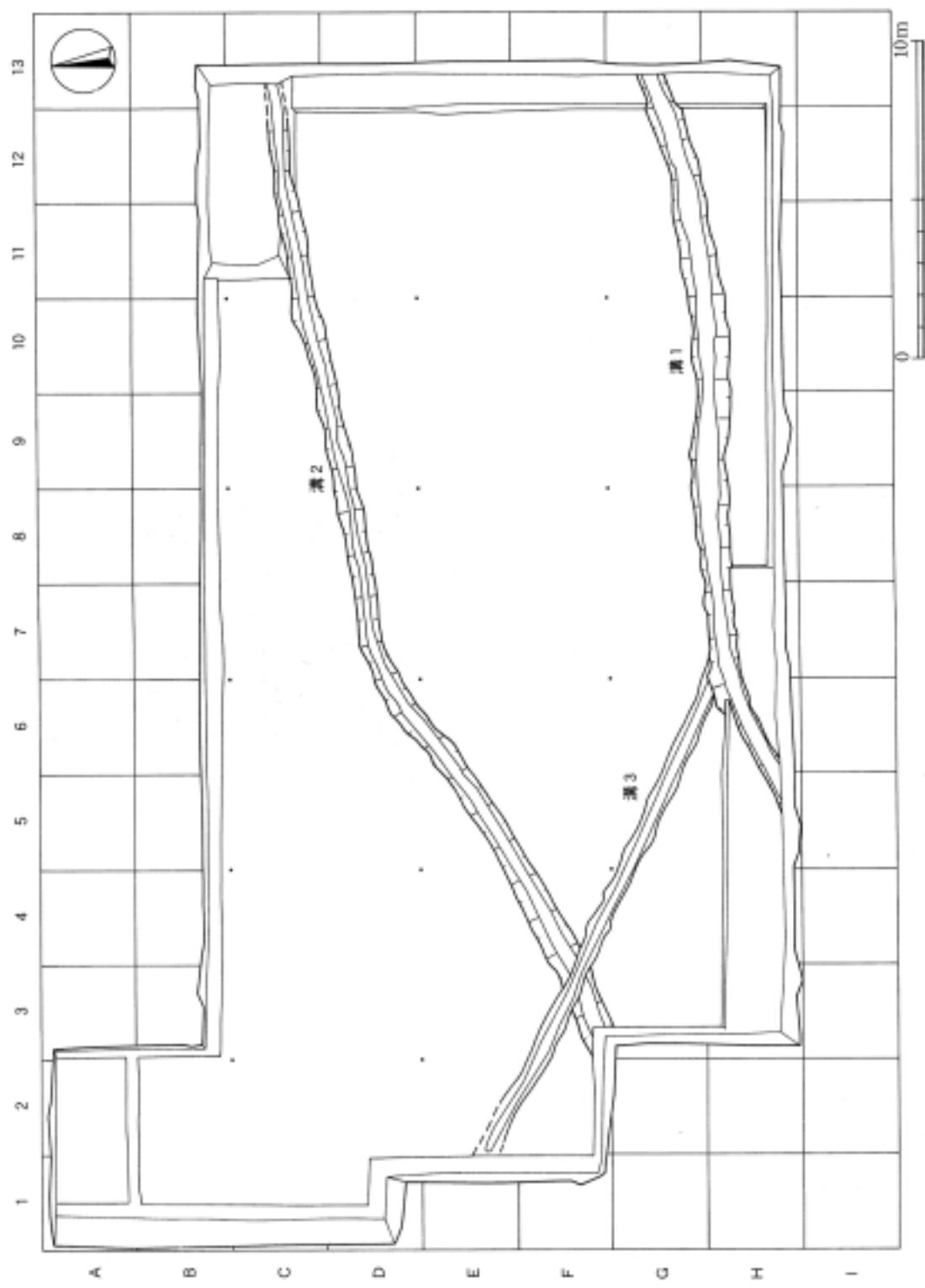


図91 弥生時代前期前葉の遺構配置

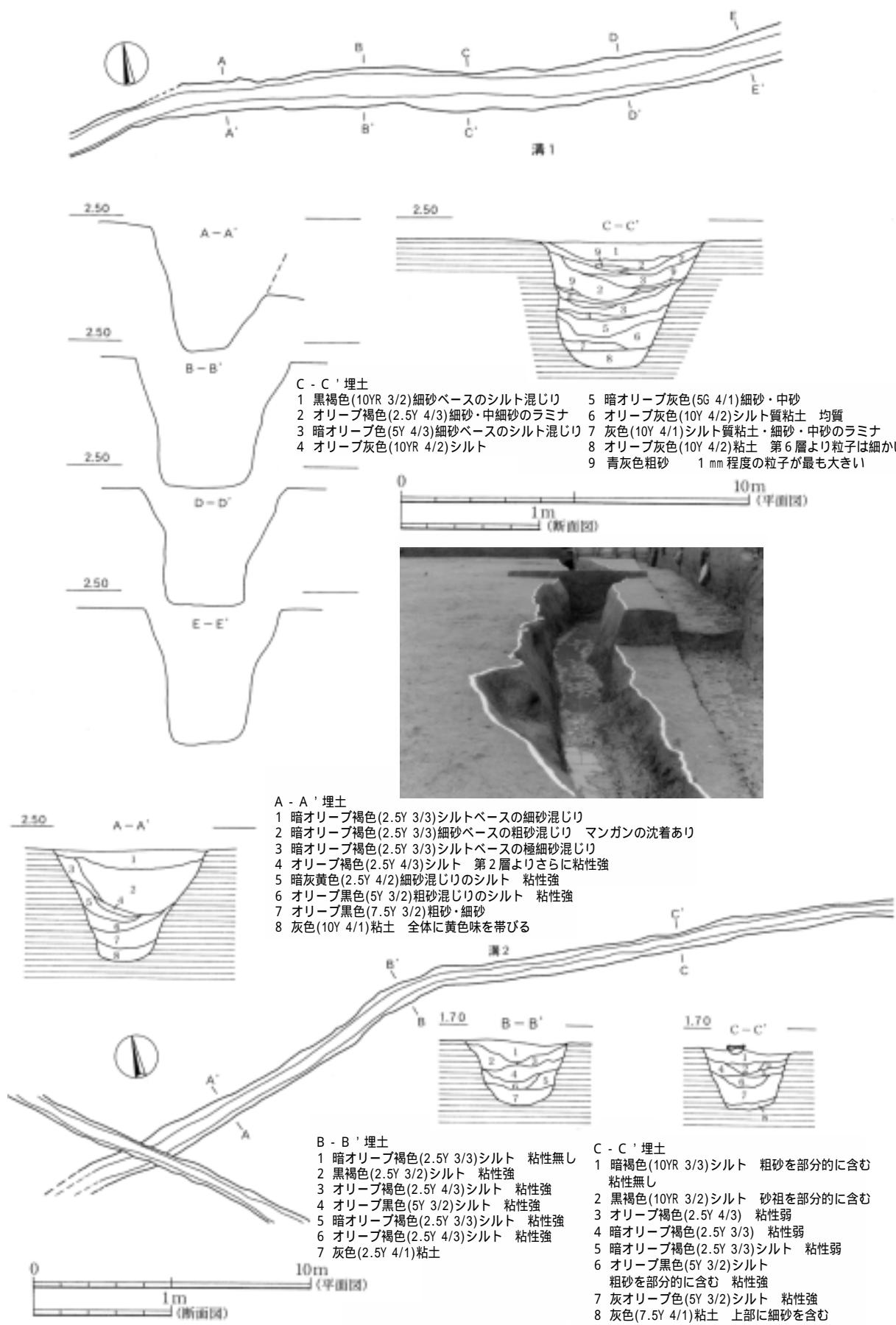


図92 溝1・溝2の状況

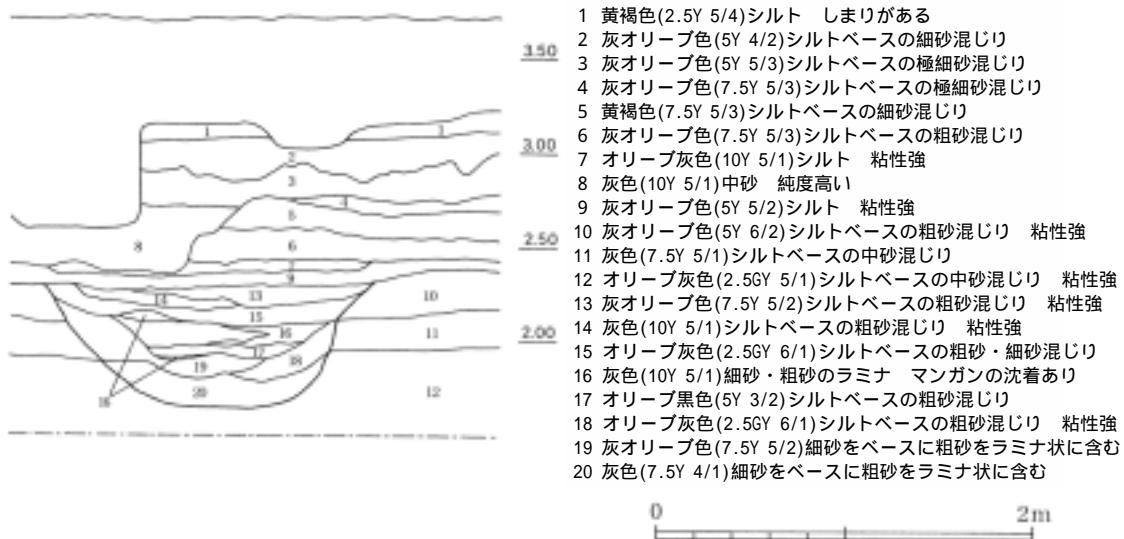


図93 溝2の堆積状況

いことがわかる。このことは地形的に下方側となる左岸側が、流水の作用で常に浸食されやすい状態にあったことを反映しているのかもしれない。

底付近に溜った粗い砂層中からは土器片が出土した。数量的には50点程度ある。ただし細片が多く、水路床部に散漫に点在する状態で、特定の場所にまとまるような状況は認められなかった。これらの土器が水路の年代推定の決め手となっている(図102)。また埋土の上方には均質な洪水砂が堆積しており、水路の肩部までを完全に覆う状態であるが、その上面からも先のものとは別に高壺形土器の脚部が1点発見された。本例をはじめとする同一層位出土の土器類の示す型式学的位置によって、溝の埋没時期の判定資料とした。

北側の溝2は、もっとも残りのよい場所で計測すると上面の幅1.1m、深さ80cmの規模をもつ(図92下段)。断面形は逆台形を示す場所と「U」字形を呈する場所がある。埋土の状況は底面付近にわずかな流水の形跡が認められるものの、溝1ほど顕著ではない。しかしその反面、埋没途中で掘削されなおしたかにみえる不整合面が埋土中に認められるところがあった(図93)。この溝もその断面形状からみて人工的に掘削された用水路と考えられる。規模は溝1よりはひとまわり小型であり、かつ浅い。また溝2についても、土手や水口・堰などの付属施設はみいだせなかった。遺物はほとんどなく、わずかに壺形土器の底部が1点、埋土中で出土したに過ぎない(図102)。

なお溝2は、その検出面が溝1よりも10cm低い。そのため調査時には溝2の方が年代的に若干古く遡る可能性を考えたが、溝床部からの土器類の出土はなく、確証はえられていない。

このほか、調査区の西側において西北西側から東南東側へと走る浅い溝を検出した(溝3)。溝の幅は70cm、平均的な深さは11cmである。この溝は溝2を切り、溝1に接したのちの走行方向が不明瞭になるものである。ただし遺物の出土はなく、溝1との関係も搅乱層の影響で明らかにしえなかった。性格不明の溝というほかはない。所属時期は溝2より新しく、弥生時代前期前葉のなかでおさまるものと考えられる。

なおこれらの溝は、その後洪水砂に覆われて埋没し、調査地一帯には砂が平均10cmの厚さで堆積している。それを平面的にみると、調査区の中央部付近ではシルトから粗砂までの粒径を異にする堆積層

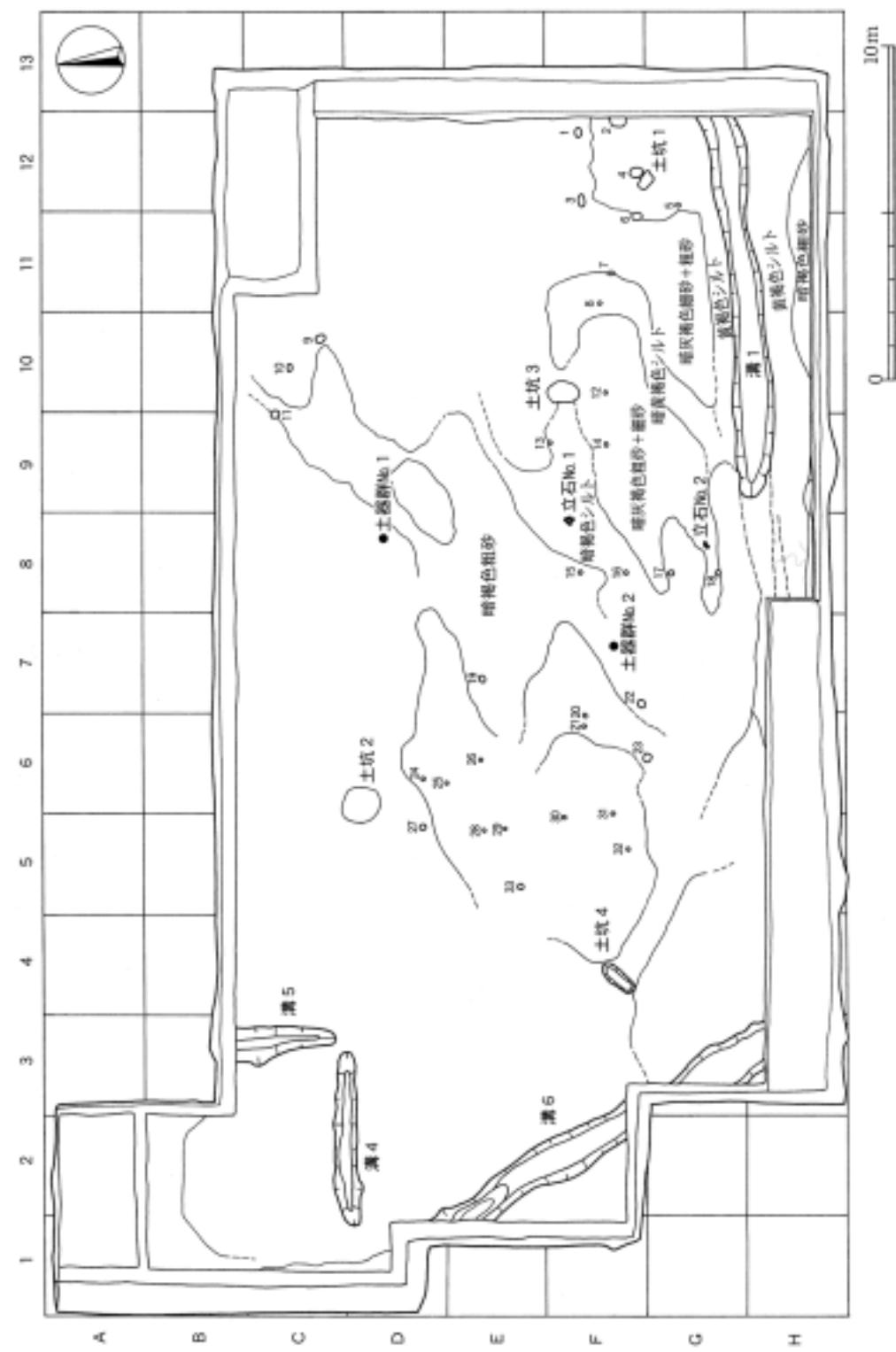


図94 弘生時代前期後葉の遺構配置

が帯状に広がり不整形な縞模様を描く部分が確認された。その一部は、東側に向かって弧状に張り出す状態である（図94）。また全体的な傾向としていえることであるが、南西側のものほど粒径が大きく、南西隅では砂礫層の広がりが認められるのに対し、北東側に砂礫はなく極細砂ないしシルト薄い堆積が帯状に広がる状況が目立った。詳細は不明ながら、こうした状況は、流れの鈍い洪水が調査区の西南隅から北東方向へ向かって流れ込んだことを示すかのようである。

このような状態の洪水砂の堆積上に、次に述べる弥生時代前期後葉の諸遺構が検出された。

（2）前期後葉の杭列と立石

杭列 洪水砂の堆積層の直上からは柱痕らしき粘土質の落ち込みが無数に検出された（図94）。平面形は円形で、その直径は10cm、深さは10～15cm程度のものが多く、下面是ほとんどが「U」字形になる。この落ち込みの掘形は確認できなかったため、これらは杭の痕跡ではないかと推定される。その分布状態ないし配列状況をみると、調査区中央部付近にまとまる数本と、そこから東側に点在するものとに分けられそうである。また、F 8グリッドからG 8グリッドまでの間にみられる4本は、直線に並ぶ状態であった（図94-15～18）。

なおこれらの杭列については、検出した層位からみて当該時期のものと判断したが、調査当時から深さが比較的浅い点が気にかかるところであった。本来はより上層に対応する杭跡を、土質の見にくさのために見落とし、基盤が砂層になって初めて識別した可能性もある。こうした不確定さを伴うことを断っておきたい。

立石 2基の立石が検出された（図95）。その平面的位置は、先の直線的にならぶ4本の杭列の東側1mほどのところで南北に並ぶ状態であり、相互の距離は4mの間隔をもっている。石材はすべて結晶片岩

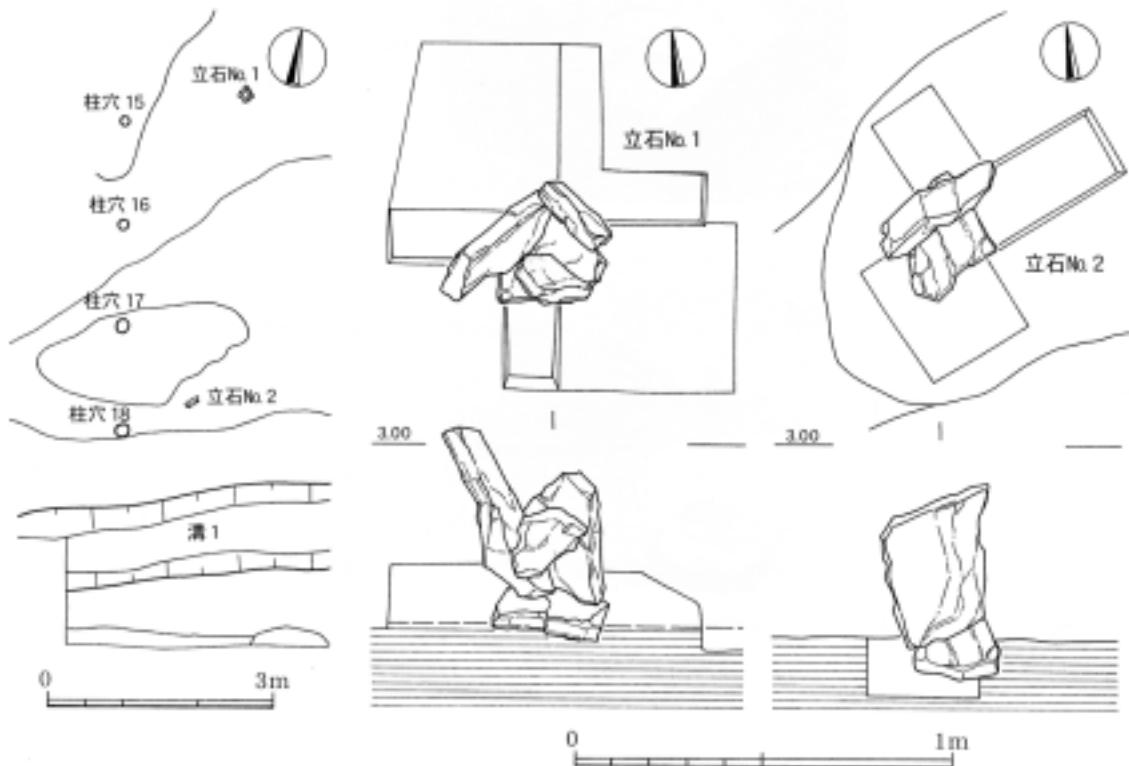
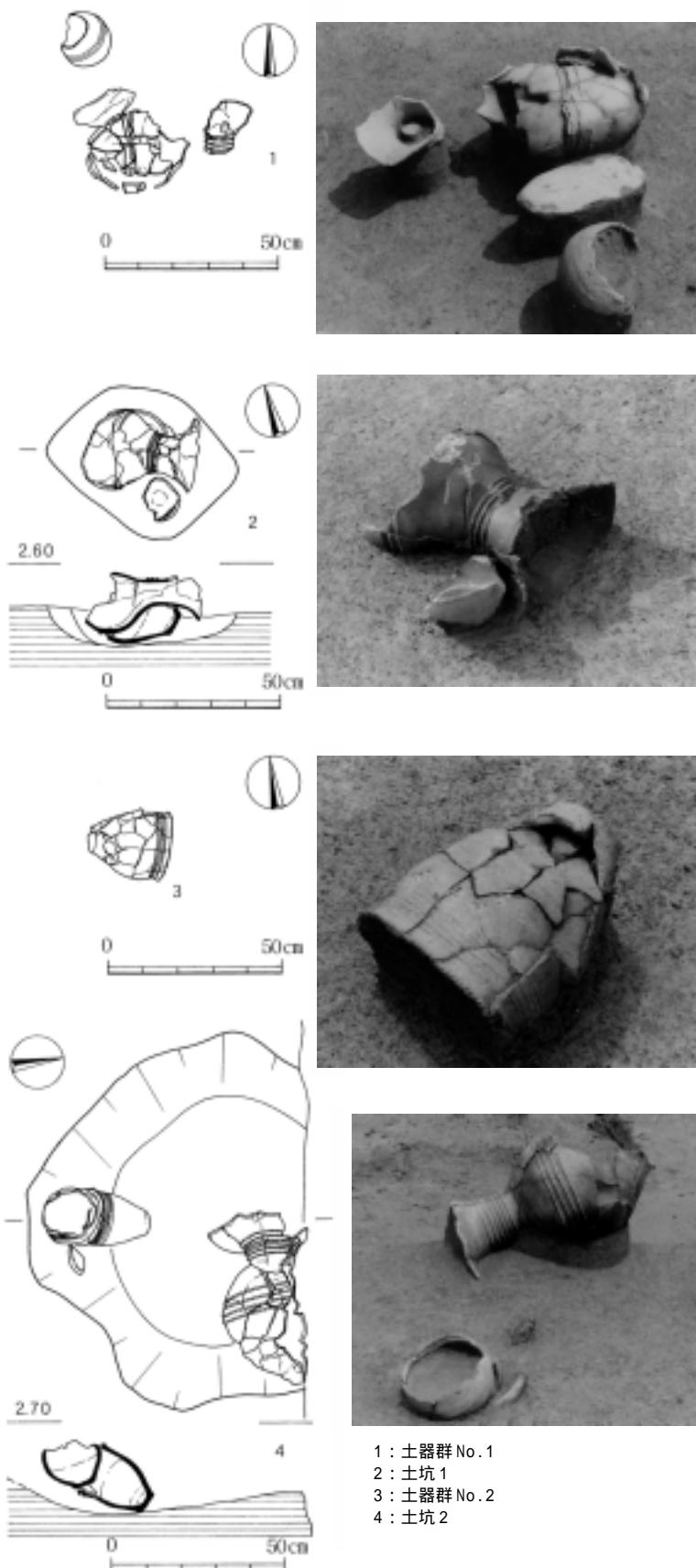


図95 立石の状況



製で、北側の立石 No. 1 は平石を置いた上に大きさの異なる 3 枚の板石を立て掛けた状態であり、底石の下面から最大の石の頂部までの高さは 57cm になる。なお立て掛けられた石のうち、もっとも小ぶりな 1 枚は底石には接しておらず、8cm ほど浮き上がった状態であった。また一方の南側の立石 No. 2 は、平石を敷いた上に 1 枚の板石を立てた状態であった。底面からの高さは 50cm である。こうした状態からみて、これらの立石には必ずや堀形と盛り土が伴っていたに違いないと推測されたのであるが、四方にサブトレーンチを穿ち、土層観察用の土手を縦横に残し、時間をかけて観察を繰り返してはみたものの、ついに堀形も盛り土も識別できなかった。また 2 基の立石は、より上層において所在を確認していたもので、その都度堀形の追究を試みたものの果たせず、本層位まで周囲を掘り下げたところで初めて底石の存在が確認されるにおよび、この時期の構造物ではなかろうかと推定せざるをえなかったという経緯もある。杭列と同様の不確定さを伴うことを、ここでも断っておかねばならない。(その後の調査経験をふまえて省みると、構造的に類似したものとして想起されるのは近世水田の境界標石である。ただしこれらについては明瞭な堀形をもち、掘り込み面も水田床土であって、今回報告の立石とも明らかに異なる状況である。類例の増加をまって訂正が必要となればその際に再度報告することにしたい。)

(3) 前期後葉の土坑と土器群・溝

土坑1～4、土器群No.1・2 杣列や立石の周辺からは、数個体の壺形土器、3個体の甕形土器がほぼ完全な形で出土している。このうち土器の周囲に浅く小規模な掘形がおぼろげながらも識別され、土器が小規模な土坑内に埋納されたものであることが判明したのは土坑1・2・3であり、その他については掘形を確認しえなかつた。そのため、土器群と便宜上仮称することにした（図94）。しかしながら、完形に近い形態の土器が地表に放置された状態のまま遺存したとは考えがたいので、本来は小規模な土坑内に埋納されたもの、ないし覆土を伴ったものと推測される。

土器の出土状況については、1個体が単独で出土する土器群No.2（図96-3）のような事例のほか、土坑2のように壺形土器と甕形土器とが組み合つたり（図96-4）、2個体の壺形土器が隣接して出土する土器群No.1および土坑1（図96-1・2）のような事例があった。このうち土坑2については甕形土器の中に小型の壺形土器を入れ込んだ状態であり、特異な状況として注目される。（これらの土坑や土器群の意味するところをただちに解明することは不可能であるが、杣列や立石が弥生時代前期後葉であると判断することができるならば、すべてが関連づけられることになり、祭祀場ともみるべき景観が復元されることになろう。）

このほか調査区の西半部、F4グリッドでは長楕円形の土坑4が検出されたが、出土遺物はなく、性格不明である（図94）。

溝4・5・6 調査区の西半部において、その北西隅で東西方向に延びる長さ5.1m、最大幅80cm、深さ14cmの溝4と、その東端付近から北側へ延びる最大幅1.1m、深さ17cmの浅い溝5が検出された（図94）。2つの溝の平面的関係は、方形の区画の存在を類推せるものである。またこれとは別に、調査区の西壁中央付近から南東方向へと延びる溝6も検出された。幅1.3m、平均的な深さ12cm前後の浅いものである。溝6については、底面に均質な細砂の堆積がみられたので流路かと思われるが、遺物の出土もなく、先の溝4・5とともに性格は不明とせざるをえない。

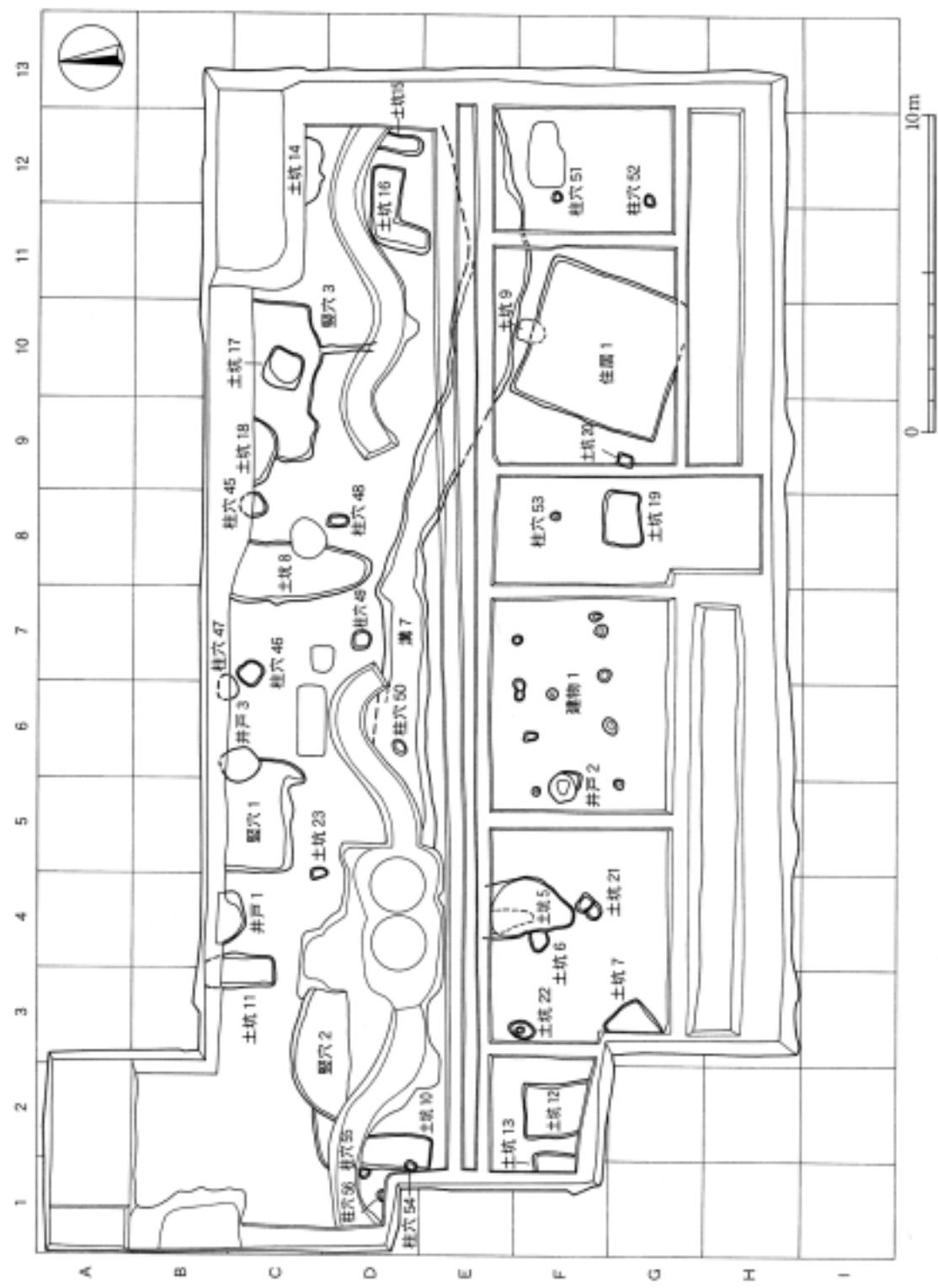
(4) 中期後半の溝と土坑

以上報告してきた前期後葉の諸遺構は、3層の黄褐色シルト層中および下面に掘り込まれたものであった。それに対し以下報告する弥生時代の各種遺構は、すべて3層上面で検出されたものである。弥生時代中期後半の遺構としては溝7と土坑5・6・7がある（図97）。

溝7 この溝は、調査地の中央部をわずかに蛇行しつつ東西に横切る状況で発見された。明治期の建物基礎によって搅乱を受けた場所が多く、遺存状態はよくない。ただし東半部において溝の堆積状況を検討できる場所があったため、およその状況を知ることができた（図98）。標準的な状況を示すA-A'ラインにおいて幅1.2m、深さ25cmをはかる。最大幅は2m、深さ30cm。断面形は緩やかな「U」字形を呈する浅い溝で、溝内埋土は検出面から底面まで一様にシルトが基本であった。底面には一部の場所で数個の小礫が散在する状況であったが、その意味は不明である。

溝の覆土全面において土器の破片がまばらに出土した。土器の内容は中期後半の壺・甕・高坏がみられたほか、前期に属する甕形土器の破片も混入した状態で見受けられた（図105）。

土坑5・6・7 中期後半に属する土坑は3基あり、ともに調査区の西半部で検出されている（図101）。土坑5はE4グリッドとF4グリッドの境界部にあり、北半部を失っているが、ゆがみの大きな楕円形を呈する。南北方向の現存長2.4m、東西1.8m、深さ40cmをはかる。床面の凹凸が顕著で、不整形な



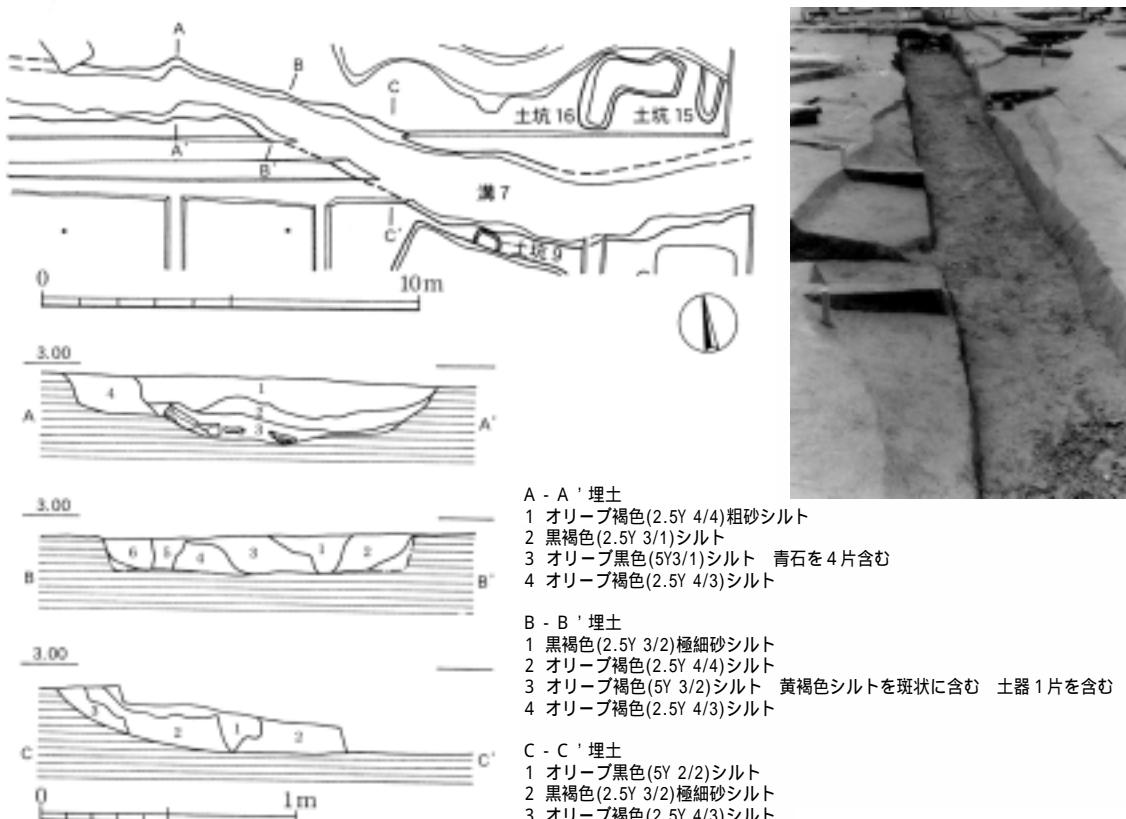


図98 溝7の状況

窪みが3箇所で認められる。底面から20cm上方の覆土中からは4個体の土器が出土した(図106)。そのうち甕形土器2点と水差し形土器1点の3個体は完形に近いもので、いずれも横倒しの状態で廃棄ないし埋置されたものと思われる。また、本土坑の西に接して、これに切られたごく小規模な落ち込みがある(土坑6)。その埋土中からは半分に分割された磨石が出土した。遺構自体は土坑5に先行するが、本例についても近接した時期のものである可能性は高い。

土坑7はG3グリッド内で検出された。土坑の東半部のみを調査したが、東辺での幅1.4m、深さ30cmをはかる。本土坑の上・下層からは数点の土器片が出土した。全形の判明するものは壺形土器1点と、器種不明の底部1点であり、壺形土器は中期後半の特徴を備える(図107-1・2)。そのため、時期は中期後半から末に属するものと判断した。(なお図101の下段に示したものは土坑7・5下半部の土層断面図および平面図であり、土器の出土位置以下の状況を示している。)

(5) 時期不詳の竪穴と土坑

このほか、やや不確定的ではあるが、当該時期に属する可能性の指摘される竪穴状の掘り込み2基、土坑2基が検出された(図99・図100)。

竪穴1 本遺構は調査区西半部の北辺、C5グリッドにおいて、その南半部が検出されたものである。平面形は方形を呈し、東西幅3.5m、南北幅は現状で2.2m、深さ10cmをはかる。埋土の上面には炉跡とあぼしき円形の掘り込みが認められ、内部には炭化物や焼土ブロックの堆積がみられた(図100)。埋土中からは弥生土器の細片が20点程度出土したほか、南辺部において埋土の上面から甕形土器1個体が完形で出土した(図108-1)。この甕形土器の示す年代から判断し、この竪穴は弥生時代中期後半に属する。

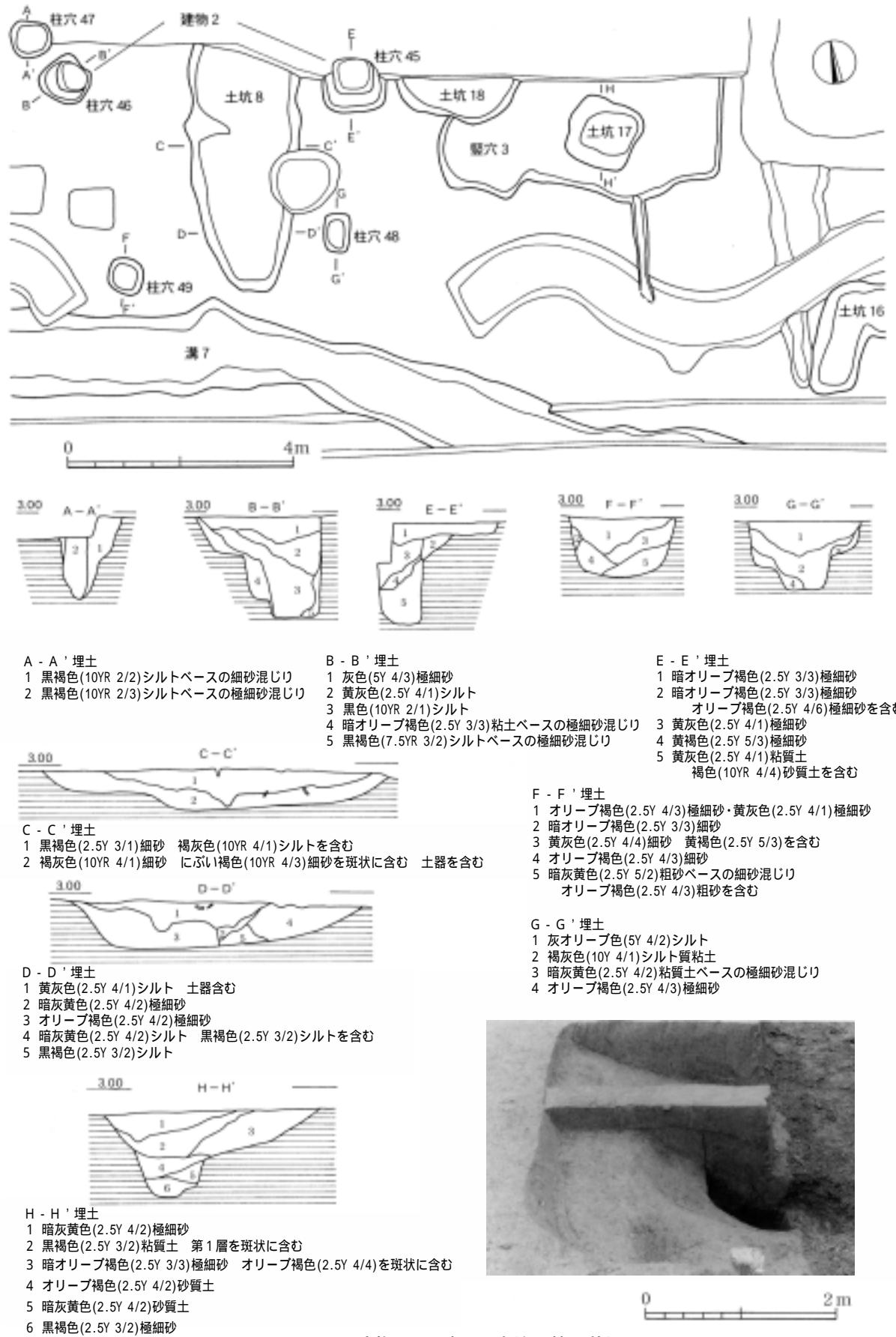


図99 建物2、豈穴3、土坑8等の状況

するものと推定した。

豊穴2 本遺構は調査区の西半部、D3グリッド周辺で検出された。搅乱によって南半部が消失しており、北半部だけの確認であるが、掘り込みの示す平面形は弧状を呈する。現状での東西幅4m、南北幅1.8m、深さ9cmである(図100)。この掘り込みの外周が仮に円形に巡るとすれば、外形は東西に長い橢円形となり、長径は4.5m前後に復元できよう。豊穴住居跡の可能性を最大限に考慮して精査を試みたが、確証はえられなかった。埋土中からは弥生時代中期末ないし後期初頭にかけての時期とおぼしき土器片が出土した(図108-3~6)。なお本豊穴の西側には、これに切られた状態の掘り込みが検出されたが、性格は不明である。溝7の西端にあたる掘り込みかもしれない。

土坑8 本土坑は、調査区東半部の北辺、C8グリッド付近において検出された。南北に長い溝状の掘

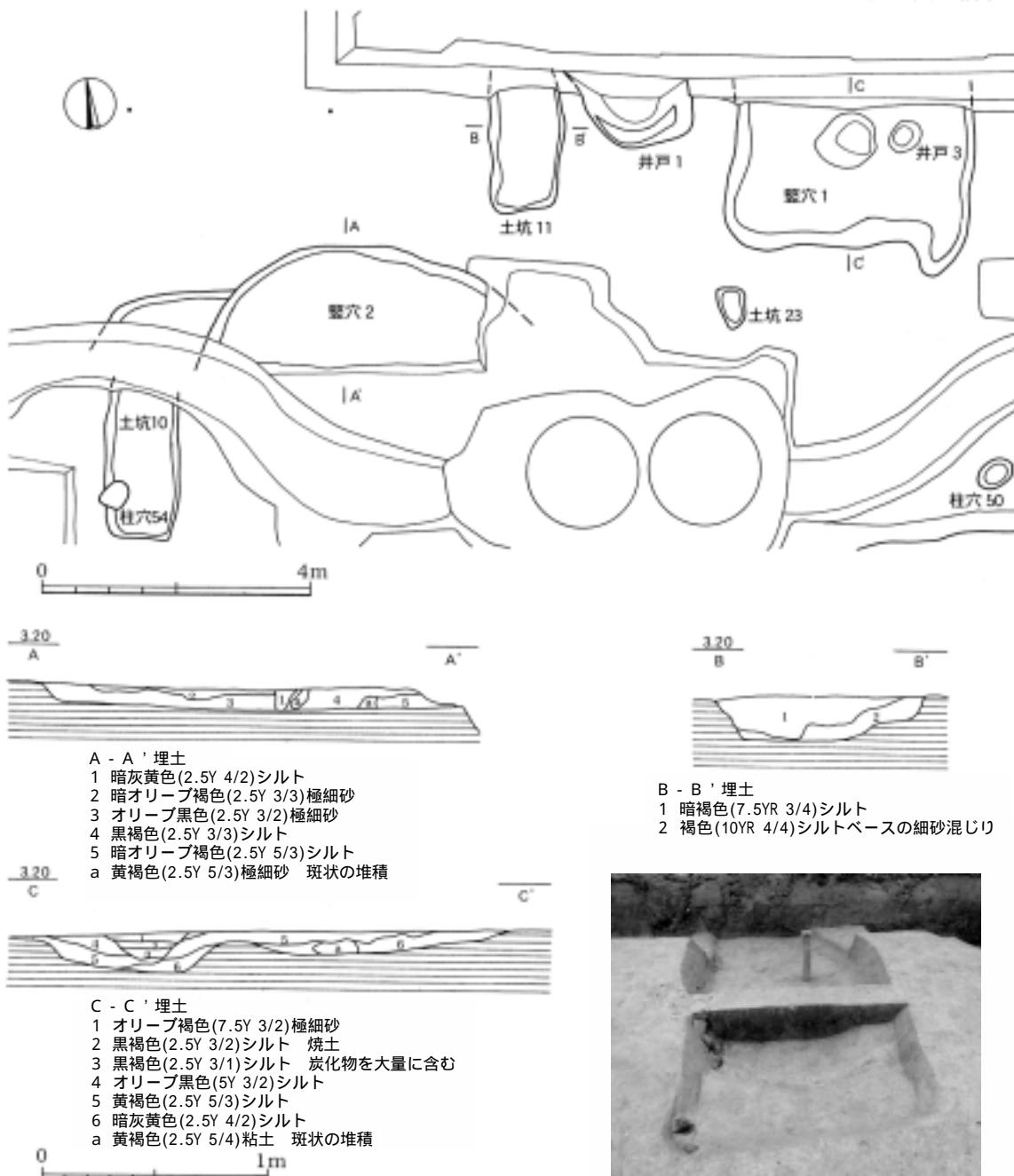


図100 建物1・2、土坑10・11等の状況

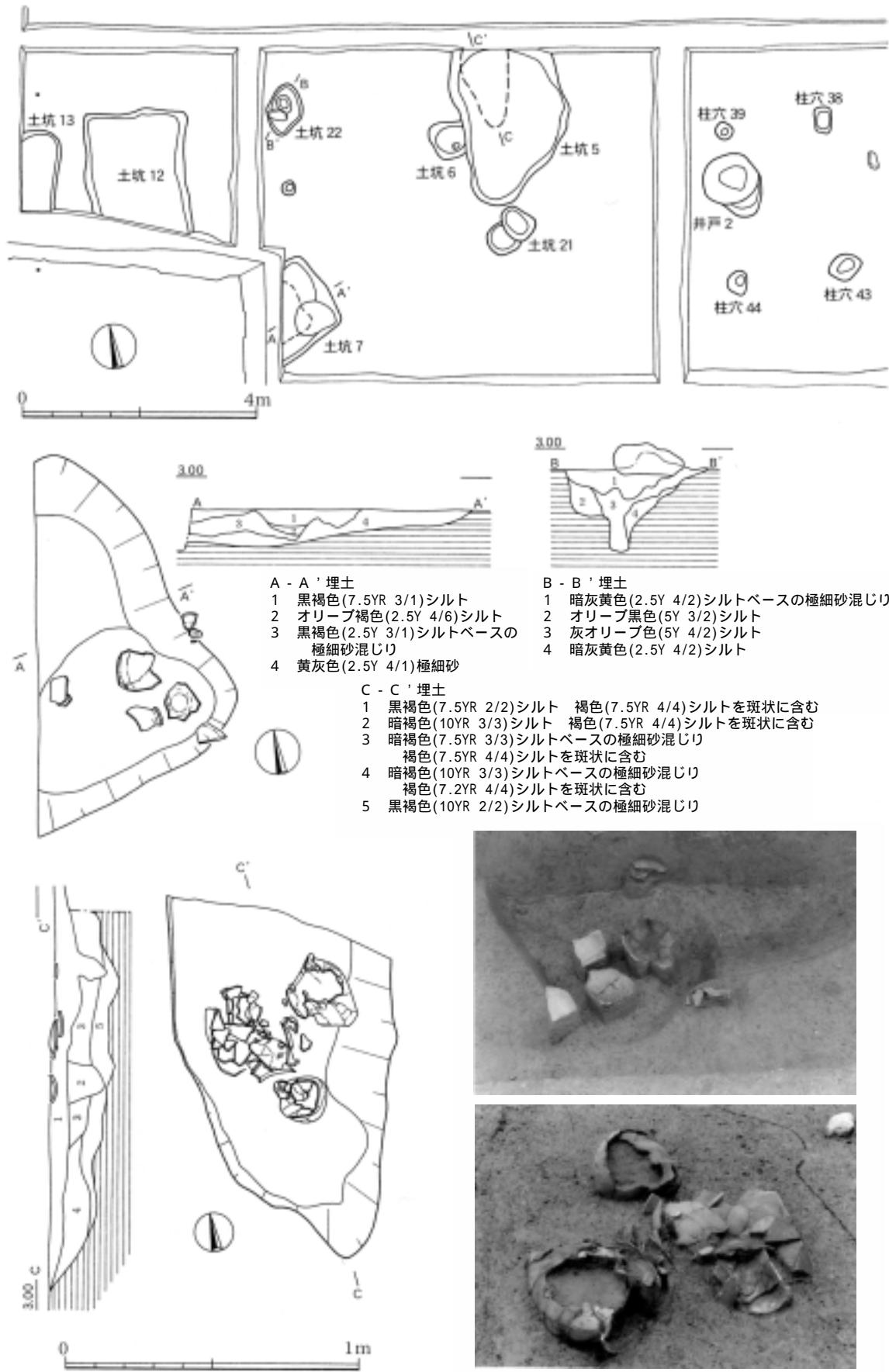


図 101 土坑 5・6・7 等の状況

り込みで、南北長4.4m、東西幅1.8m、深さはもっとも深いところで22cmある。埋土は2層ないし3層に区分されるが、総じてシルト層の堆積であり、土坑の性格を推定するまでの材料はなかった（図99）。埋土中からは弥生土器片が多数出土した。破片総数は約50点を数え、器種構成は壺形土器、甕形土器、高坏であるが、いずれも小片で年代を詳細に知りうるだけの破片はわずかである（図108-2）。土器類の示す年代から推定して、本土坑も弥生時代中期末頃から後期前半にかけてのものであろうと思われる。

土坑9 F 10グリッドにおいて、竪穴住居の北辺に接する状態で検出された。平面形は方形を呈し、一边の長さは65cm、深さ25cmをはかる（図97）。埋土中からは甕形土器2点が出土した（図107-3・4）。

3 弥生時代の遺物

（1）弥生時代前期の土器

溝1・溝2、土坑1～3と遺物包含層出土の土器がある。

溝1出土土器 図102の1～26は溝1出土の土器である。1～3は壺形土器、4～26は甕形土器である。1は内面に沈線を2条施す。また、胎土中に結晶片岩を含んでおらず、搬入品の可能性がある。2は頸部から胴部にかけての破片で、沈線間に刻目を施す。3は底径7.2cmの小型品の底部で、底部直上に3条の沈線を施したものである。甕形土器は、口縁部の形態が判明するものすべてが如意形口縁を呈する。4は胴部無文のものである。外傾接合で、外面はハケメのちナデ、内面はナデ仕上げである。なお、10・13・18と同様に口縁部外端を刻む。5も外傾接合で、外面ハケメのちナデ、内面ナデ仕上げである。7～9・11・12・19・21と同様に口縁部全面を刻む。6は胴部に外傾の接合面を利用した段を施し、その上に「V」字刻みを施す。また、頸部に3本単位の山形文を描く。14はやや外反の緩いものである。口縁部両端に刻目を施す。15～17は無刻のものである。20・21は胴部に1～2条の沈線を施すものである。22～26は甕形土器の底部である。22・23は外面ハケメ仕上げ、他はナデ仕上げである。

これらの土器はいずれも古い要素を持っており、前期前葉に属するとみてよいだろう。

溝2出土土器 図102の27は溝2出土の土器で、甕形土器の底部1点のみの出土である。時期の詳細は不明である。

土坑1～3出土土器 図103には土坑1～3出土資料を示した。1は土坑3、2～4は土坑2、5・6は土坑1出土の土器である。1は甕形土器で、推定口径24.0cmをはかる。胴部に5条の沈線を施し、口縁部全面を刻む。外面はハケメ、内面はナデ仕上げである。2は壺形土器で、口径28.2cm、胴部最大径25.7cm、底径7.0cm、器高42.4cmをはかる。大きく開く口縁部、長い頸部、縦長の胴部を有する。頸部に6条、胴部に4条の貼り付け突帯を施す。外面はハケメのち粗いヘラミガキ仕上げ、内面は頸部以上がハケメのちヘラミガキ、以下ナデ仕上げである。3は胴部最大径13.3cm、底径8.0cmの小型の壺形土器である。胴部に4条の沈線を施し、内・外面ともにハケメのちナデによって仕上げる。4は甕形土器で、口径16.3cm、底径6.8cm、器高19.1cmをはかる。口縁部は断面三角形の逆「L」字状口縁である。外面にハケメ、内面にナデを施す。5は壺形土器で胴部最大径12.8cm、底径7.6cmの小型品である。胴部に1条の貼り付け突帯を施す。外面はハケメ、内面は板ナデ仕上げである。6は壺形土器で、口径18.8cm、胴部最大径21.0cm、底径8.0cm、器高37.5cmをはかる。胴部最大径が口径を若干上回るが、長頸化、長胴化の著しい器形である。頸部・胴部ともに3条の貼り付け突帯を施す。外面はハケメのち丹念なヘラ

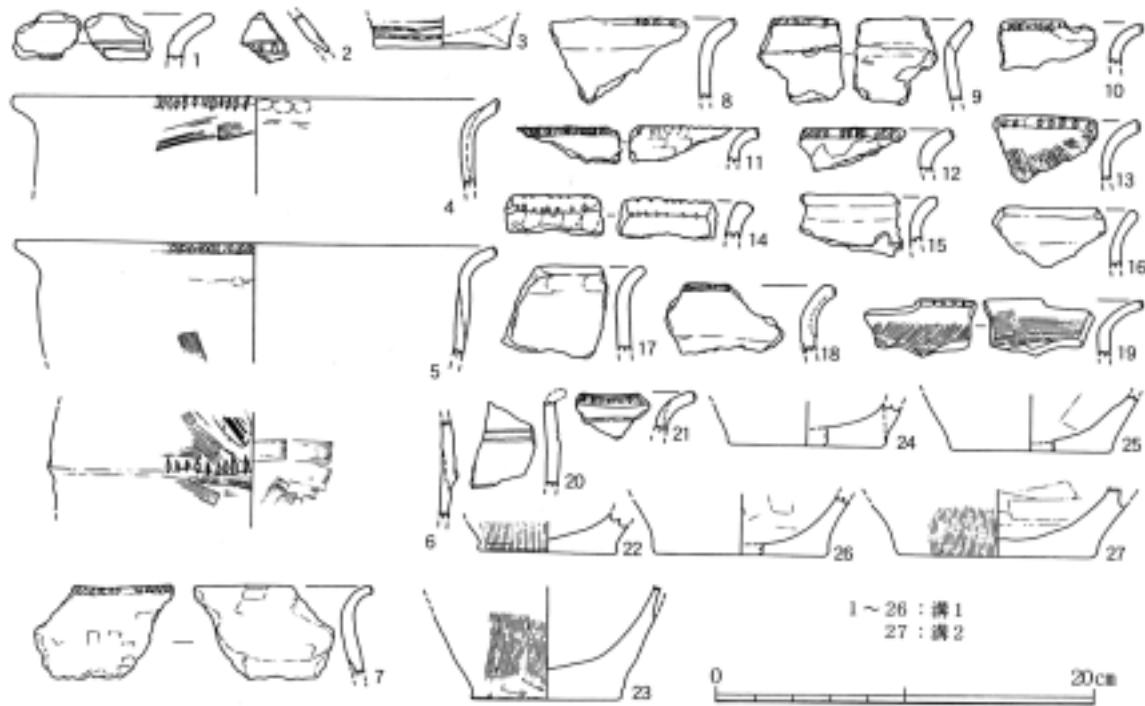


図102 溝1・2出土土器

ミガキ、内面は口縁部はハケメのちナデ、頸部以下はナデにて仕上げる。

いずれの土器も前期後葉に属するとみて間違いない。

包含層出土土器 図104の1～22は黄褐色シルト質粘土層出土の土器である。1～11は壺形土器、12・13・16～22は甕形土器、14は高坏形土器、15はミニチュアの鉢形土器である。1の壺形土器は、口径17.2cm、胴部最大径18.9cm、底径7.6cm、器高31.8cmをはかる。下膨れのする胴長の器形で頸部・胴部ともに3条の貼り付け突帯を施す。刻目は他の資料よりも粗大で、横長の「○」字を呈する。調整は外面ハケメ、内面ナデ仕上げである。2は胴部最大径14.0cm、底径7.6cmの小型品で、胴部に3条の沈線を施す。3は壺形土器の底部である。なお、1～3は折り重なって出土したものである。4は口径7.7cm、胴部最大径12.0cm、底径6.6cm、器高14.8cmの小型品である。頸部の短い特異な器形を呈する無文の土器で、外傾接合である。5は胴部最大径15.9cm、底径7.7cmをはかり、頸部に3条、胴部に4条の沈線を施す。外面はハケメのちヘラミガキ、内面は板ナデ仕上げである。6は口径4.7cm、胴部最大径6.2cm、底径3.5cm、器高7.7cmのミニチュア土器である。口縁端部を刻み、頸部・胴部にそれぞれ2条の沈線を施す。7～9は胴部片で、7は木葉文、8は山形文、9は綾杉文を施す。10・11は頸部と胴部の境界の破片で、段を施す。甕形土器はいずれも如意形口縁を呈する。12は口径22.2cm、底径7.8cm、器高29.3cmをはかる。胴部には半裁竹管を利用した2本1単位の沈線を5単位10本施す。外面はハケメ、内面はナデ仕上げである。13は胴部に沈線を5条施したものである。16は口径17.4cm、底径7.3cm、器高21.6cmをはかる。胴部には半裁竹管を利用した3単位計6本の沈線を施す。17は推定口径26.4cmをはかる。口縁部外反の強い無文の土器で、ほかの資料に比べてハケメ原体の木目の間隔が広い。18～22は口縁部片である。18は胴部に3条以上の沈線を施し、口縁部全面を刻む。19は胴部に段を施し、20～22と同様口縁部外端を刻む。14の高坏形土器は現高9.2cm、底径9.2cmの小型品である。脚部に一対の穿孔を有し、外面ハケメ、内面ナデ調整である。15の鉢は、口径8.7cm、底径7.5cm、器高3.5cmのミニチュア土器である。

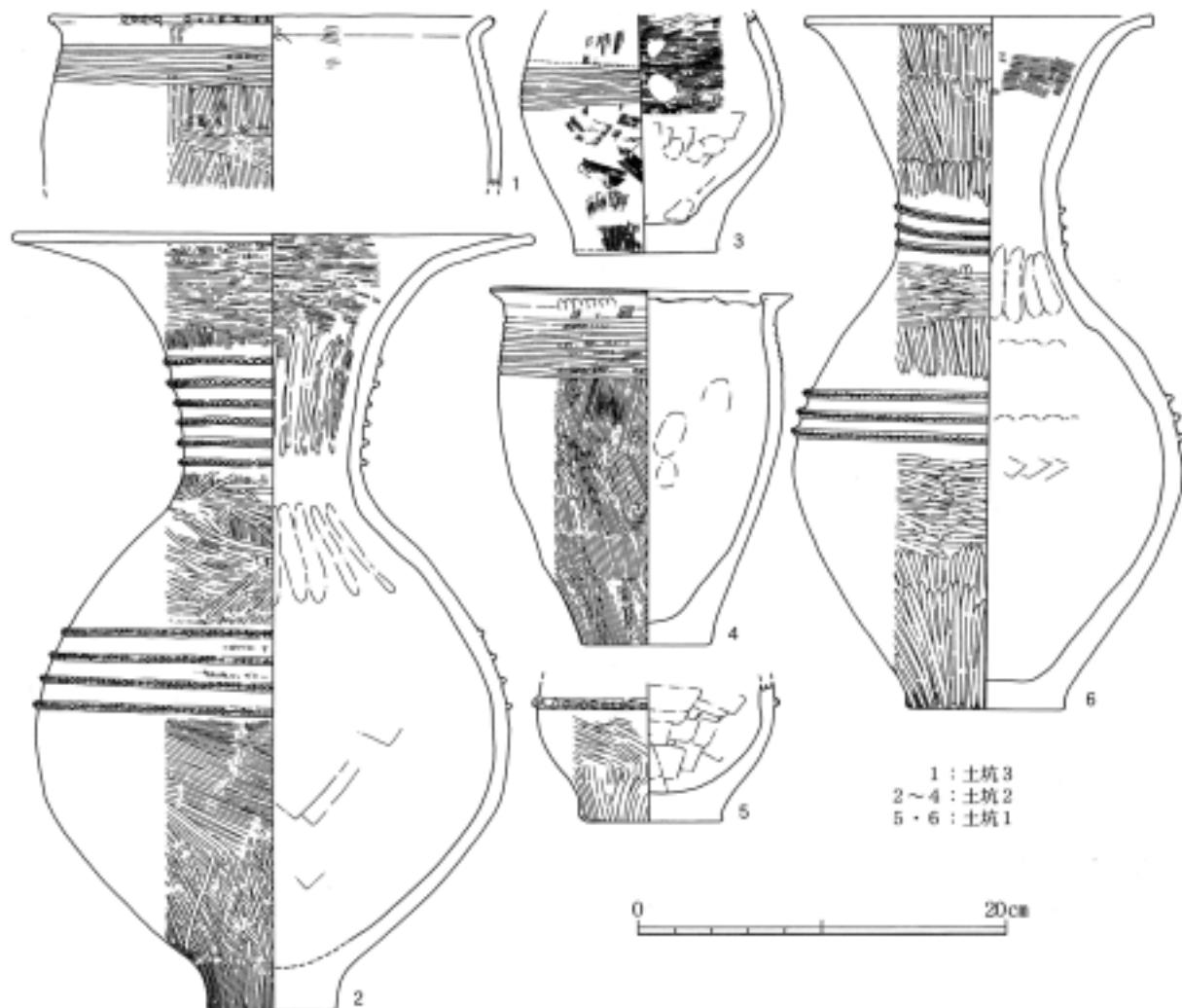


図103 土坑1・2・3出土土器

以上の土器は前期前葉から中葉の土器（7～11・19～21）と前期後葉（1～6・12～18）とに分かれる。前期前葉から中葉の土器は小片で風化しているが、前期後葉の土器の残存率は良好である。

23～31は暗褐色砂層出土の土器で、23～26は壺形土器、27～29は甕形土器、30・31は鉢形土器である。23は口径14.4cmをはかり、口縁端部に1条、頸部と胴部の境界に3条の沈線を施す。24も口縁端部に沈線を施す。25は胴部片で山形文を施す。26は底部片である。甕形土器27は口縁部内端、28は口縁部外端、29は全面を刻む。鉢形土器30は口縁端部に横方向の沈線を施したのち、刻みを加える。31は胴部片である。

暗褐色砂層出土資料は、前期中葉に属するものが主体で、一部前期前葉を含むものと思われる。

(2) 弥生時代中期の土器および土製品

中期の土器類としては溝7出土遺物と土坑5・7・8・9、竪穴1・2出土の資料がある。また土器片再利用の土製紡錘車も3点出土している。

溝7出土土器 溝7出土の土器は図105に示したとおりである。壺形土器（1～3）・甕形土器（4～13）・高坏（14～18）がある。1は壺形土器の口縁部片であり、推定口径は19.6cm。上面には櫛歯状工具による列点文が巡らされ、側面には2条の凹線が施される。2は頸部の破片であり、下端部に貼り

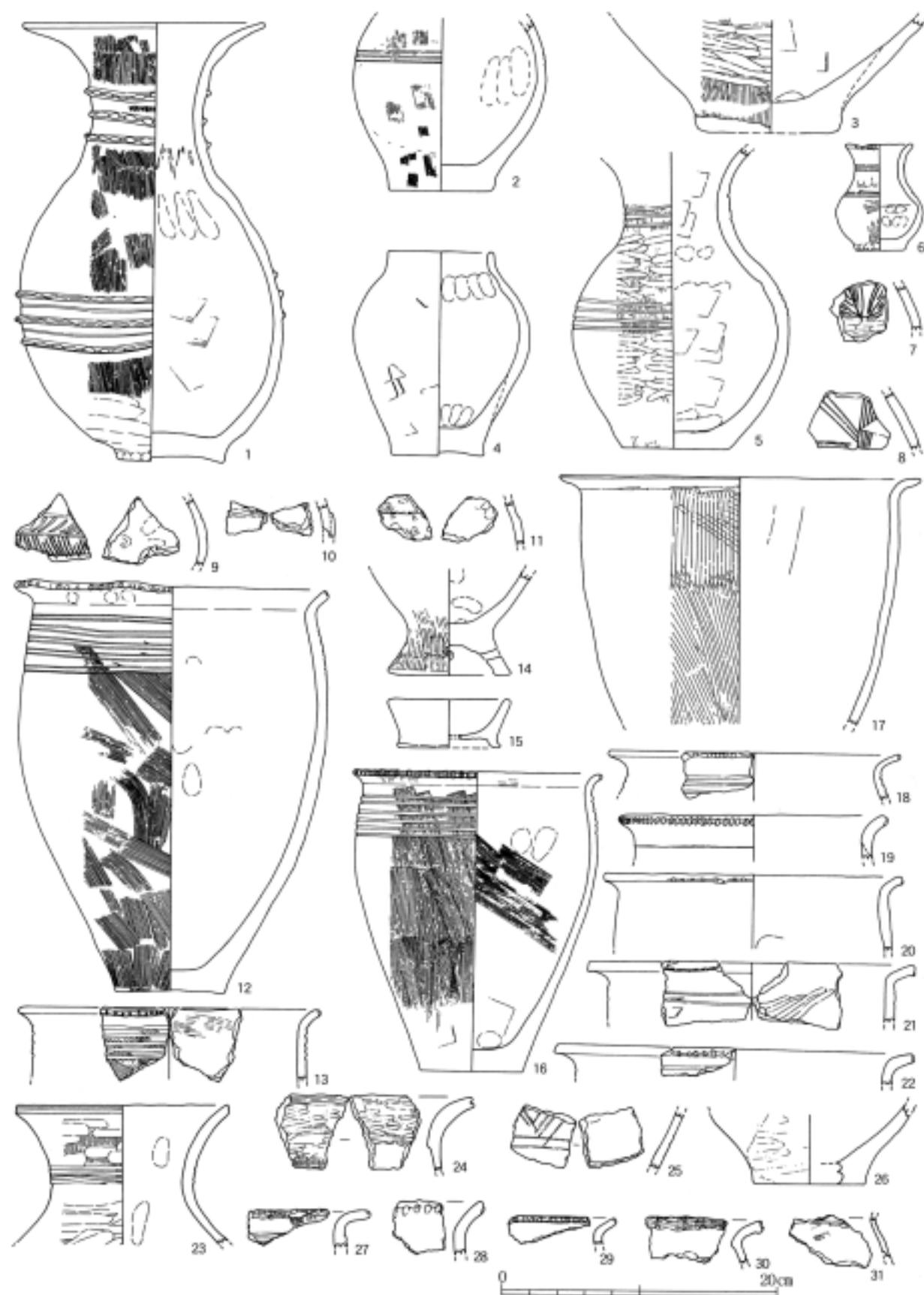


図104 包含層出土土器(1)

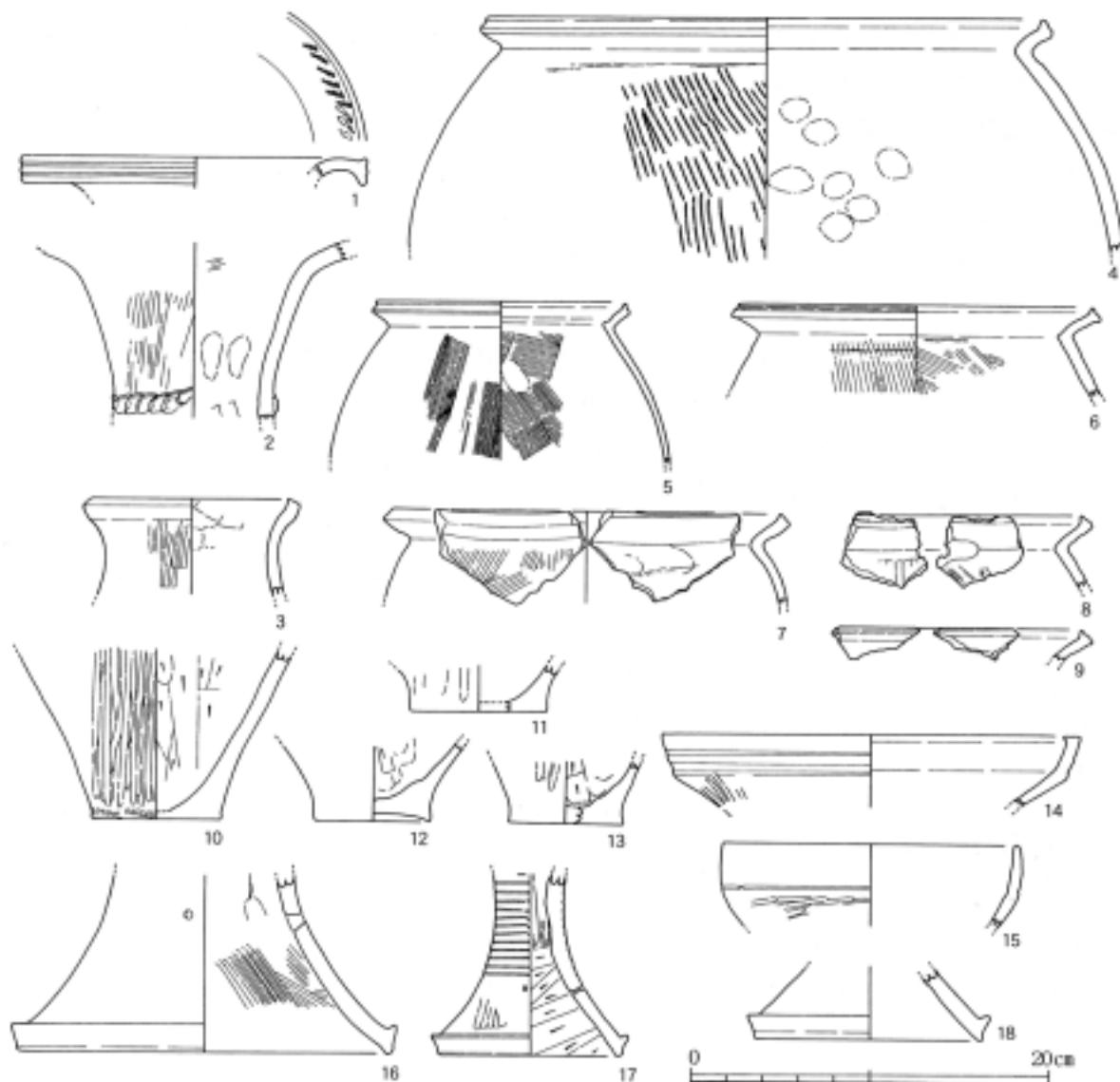


図105 溝7出土土器

付け突帯を巡らす。3は口径11.1cmの直口壺で、口縁部付近を肥厚させ、端部をナデによるつまみ上げ状に仕上げる。4・5・6は甕形土器のうち、「く」の字状に開く口縁部の側縁に1条の凹線を巡らすタイプである。4は大型の甕形土器で口縁部推定径31.1cm、外面には平行叩きが施されている。5は口縁部推定復元径14.0cm、内外面ともに木目の細かなハケメを施す。6は口縁部推定径19.8cm、内外面ともにハケメを施す。7・8・9は同様の甕形土器ではあるが、口縁部側縁の凹線が明瞭でないタイプである。7は推定口径21.8cmで、外面はハケメ、内面はナデ仕上げ。8と9については小片のため口径等が不明である。10～13は甕形土器の底部片で、器面調整はすべて外面縦のヘラミガキ、内面はヘラケズリである。14・15は高壺の壺部片である。14は推定口径23.4cm、口縁部端部には面取りがあり、側面には2条の凹線を巡らす。壺部下半部の器面調整は縦ヘラミガキである。15は復元口径16.7cm、口縁端部は丸くおさめられており、側面には1条の浅い凹線が巡る。壺部下半部の器面調整は横ヘラミガキである。16・17・18は高壺の脚部片で、16には赤色顔料の付着がみられる。16・17の脚部には円孔が穿たれているが、いずれも非常に小型の穴で装飾的効果は低い。17には籠描きの沈線が施されている。

これら溝7出土の土器類は、概して弥生時代中期後半の特徴を示しており、おおむね畿内第IV様式に

併行するものと考えられる。ただし2の壺形土器などはやや古相である可能性が指摘でき、細かな点をみれば古相と新相とに区分しうるかもしれない。

土坑5出土土器 本土坑出土遺物には水差形土器1点、甕形土器3点がある(図106)。1は把手をもつ水差形土器で、現高18.2cm、胴部最大径18.1cmをはかる。直口気味に立ち上がる頸部には4条の浅い凹線が巡る。把手は胴部上端にとりつき、胴部上半には櫛歯状工具による刺突列点文を3段に施す。胴部下半部は丁寧なヘラミガキ仕上げで、その上半は横方向のヘラミガキ、下半は縦方向のヘラミガキである。甕形土器のうちもっとも大きな4は、高さ34.1cm、口縁部径17.1cm、胴部最大径25.0cmをはかる。口縁部から下に10cmほど下がったところで胴部最大径となり、胴部の形態は上半部が広く下半部がすぼまり気味となる。「く」の字状に屈曲する口縁部の端面には浅い2条の凹線が巡り、端部は上下につまみ上げられている。器面調整は外面の下半部が縦ハケのち縦ヘラミガキ、上半部はタタキメのち荒い縦ハケであり、内面は下半部ヘラケズリ、上半部ナデである。内面上半部のナデは纖維状の当てものをもちいた痕跡がみられ、このことと関連するのか別に板ナデを施したのか不明ながら、斜めの段が平行に巡る状態が観察される。胴部上半部の1箇所には内側からの打割による直径約2cmの穿孔が認められる。やや小ぶりの3は高さ25.0cm、口縁部径15.1cm、胴部最大径19.0cmである。口縁部は外方へと屈曲し、端部は上方につまみあげられるが、側面には強いナデがおよぶだけで凹線は施されていない。胴部上半部のほぼ全面にはスヌの付着がみられる。器面調整は外面の下半部が縦ハケのち縦ヘラミガキ、上半部はタタキメのち縦ハケであり、タタキメはわずかな凹凸として残るだけである。内面は下半部ヘラケズリ、上半部はナデである。2は上半部の破片で口縁部推定径16.1cmになる。口縁部の形状、器面調整等は3と同じである。

これら土坑5出土土器は弥生時代中期末の様相を示しており、畿内第IV様式後半に比定される。湯浅利彦編年(湯浅1994)のIV期新段階にあたるものと考えられよう。

土坑7出土土器 本土坑からの出土の土器は壺形土器1点、器種不明の底部片1点である(図107)。

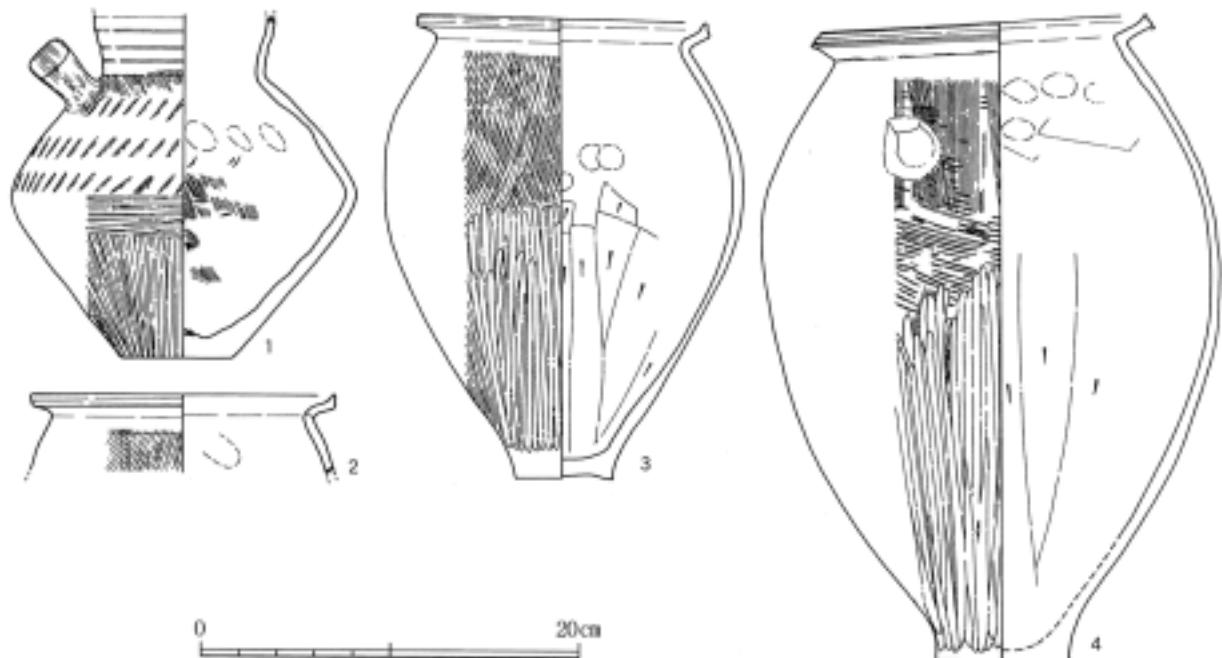


図106 土坑5出土土器

1・2)。1は壺形土器で、口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部の推定径は21.1cm。口縁部の開きは少ないが、その上面には直径2mm前後の穿孔が4箇所にみられ、これらの穿孔は2個で一対をなす。頸部には3条の凹線が巡る。頸部と胴部の境界は不明瞭で、頸部からなで肩状に胴部へと移行する。器面調整は胴部から頸部にかけての外面縦ハケ、口縁部はナデ、内面は胴部上半がヘラケズリ、頸部から口縁部にかけてはハケメのちナデ消しである。2は底部片で、1と同一個体である可能性の指摘されるものである。外面はハケメ、内面はヘラケズリである。

土坑9出土土器 本土坑からは甕形土器2点(図107-3・4)が出土した。3は推定復元径27.8cm、口縁端部を上方につまみあげ、その端面には擬凹線が巡る。4は推定復元径15.8cm、胴部最大径23.6cmになる。「く」の字状にひらく口縁部の端面には1条の沈線が巡る。本土坑の遺物については、やや不確定さが伴うが、弥生時代中期末頃に位置づけられるであろう。

豊穴1・豊穴2、土坑8出土土器 図108に示したのは豊穴1・2、土坑8からの出土土器類である。豊穴1からは甕形土器が1点出土している(図108-1)。完形品で、高さ31.8cm、口縁部径16.2cm、胴部最大径22.1cmをはかる。口縁部は鋭く外方へ屈折し、端部は上方に立ち上がる。側面には2条の凹線が巡る。胴部最大径は上半部約2/3のところになり、下半部はすぼまり気味となる。器面調整は外面の下半部から2/3の範囲まで縦ハケのち縦ヘラミガキ、それより上部はタタキのち縦ハケである。内面は下半部ヘラケズリ、上半部はハケメのちナデ仕上げである。

2は土坑8出土の甕形土器で、口縁部の復元推定径は15.6cm、「く」の字状に屈折する口縁部は、その端部を丸くおさめる。器面調整は外面が細かなハケメ、内面は胴部上端までヘラケズリがおよぶ。

図108の4・5・6は豊穴2の出土土器で、すべて壺形土器片である。4は推定復元径12.9cm、口縁端部は上方に立ち上がり、端面には2条の凹線が巡る。器面調整は頸部内外面とも縦のヘラミガキである。

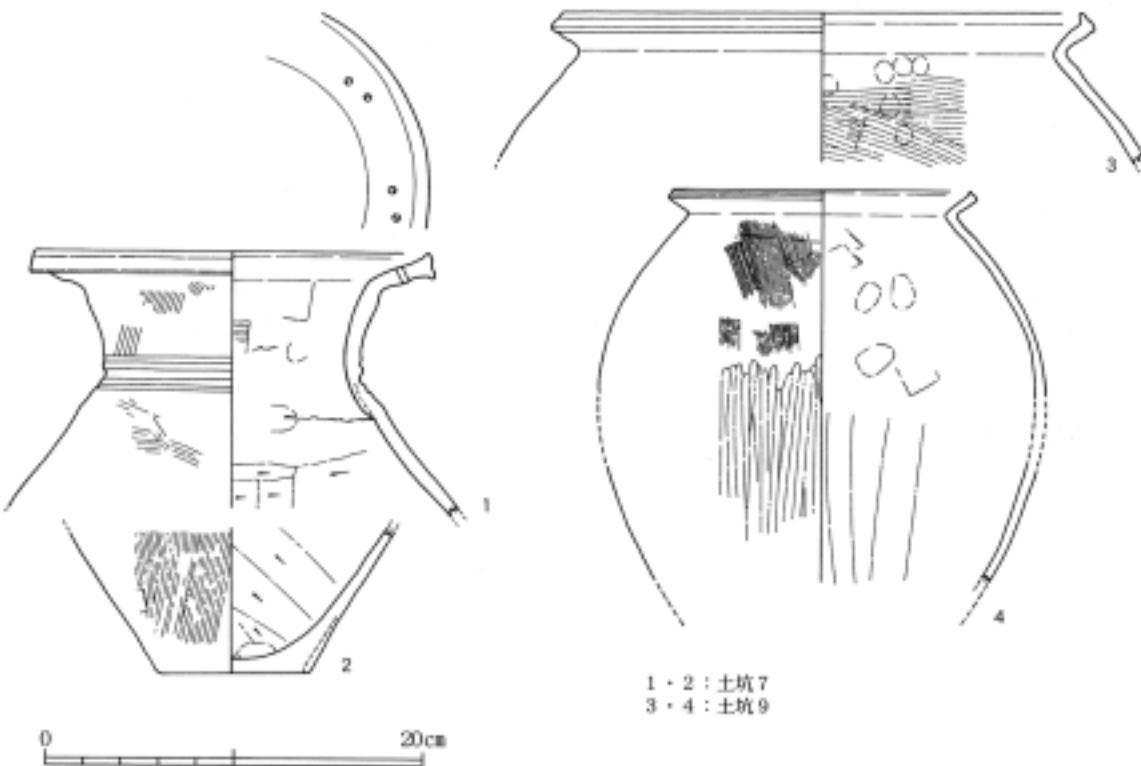


図107 土坑7・9出土土器

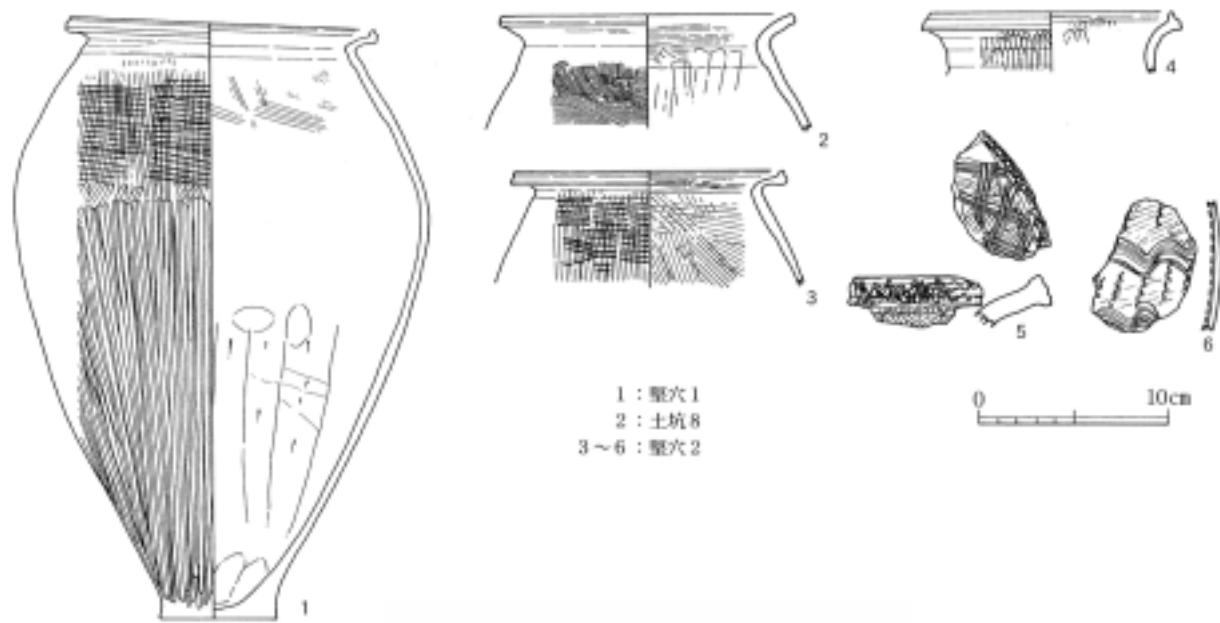


図108 穫穴1・2、土坑8出土土器

5は壺形土器の口縁部片で、内面には櫛歯状工具による格子目文を施し、側面には波状文を施す。6は壺形土器の胴部片で、櫛歯状工具による波状文と貝殻腹縁による刺突文が交互に施されている。

上記の各遺物は、4にやや新しい様相がみられ、弥生時代後期初頭にくだる可能性が指摘できるほか、5・6は古い様相を示すものではあるが、全体としてみた場合には弥生時代中期後半ないし末に比定しうるようである。

包含層出土土器 包含層出土の遺物にも弥生時代中期の土器は含まれている。図110の3から25までが当該遺物であり、壺形土器（3・11）、甕形土器（7～10・12・15～19・21～25）、高坏（4～6・20）、鉢形土器（13・14）がある。このうち7と25の甕形土器2点は全体の特徴の把握できる良好な資料である。7は高さ34.2cm、口縁部径19.0cm、胴部最大径26.2cm。「く」の字状に開く口縁部は端部が上方へとつまみ上げられ、側面には1条の凹線が巡る。胴部最大径は上半部約2/3のところであり、その位置にはハケメ原体による連続刺突文が巡る。器面調整は外面の下半部から2/3の範囲まで縦ハケのち縦ヘラミガキ、それより上部はタタキのち縦ハケである。内面は下半部ヘラケズリ、上半部はナデ仕上げである。25は推定高25.5cm、口縁部径15.2cm、胴部最大径20.3cmをはかる。口縁部は「く」の字状に開くが、その角度は鈍く、端部も上方に立ち上がるものの、端面には凹線があよばない。器面調整は外面の下半部が縦ハケのち縦のヘラミガキ、上半部は縦ハケ仕上げである。内面は下半部ヘラケズリ、上半部はハケメである。このほか、3の壺形土器には櫛描き波状文と沈線文が交互に施されていること、19の甕形土器胴部には連続刺突文が施されている点が注意をひく。

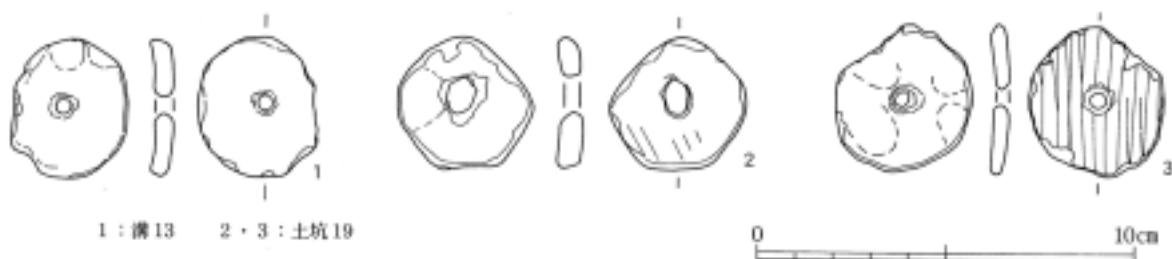


図109 紡錘車

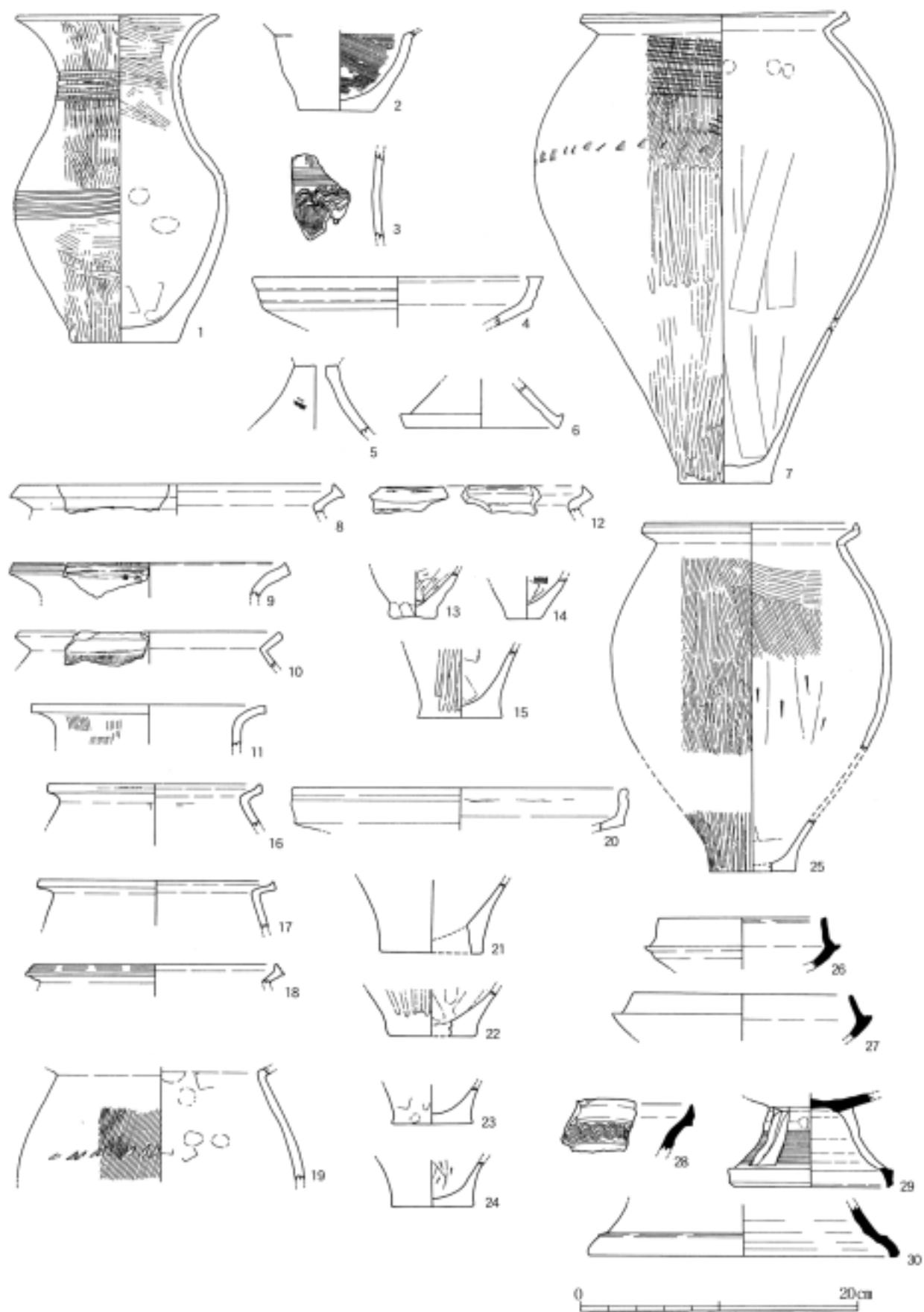


図110 包含層出土土器(2)

土製紡錘車 図109には土製紡錘車を示した。3点ともに甕形土器の胴部片を再加工したもので、不整形な小型紡錘車と呼ぶべき遺物である。1は長径3.6cm、内孔の径5mm、2は長径3.4cm、内孔の短径6

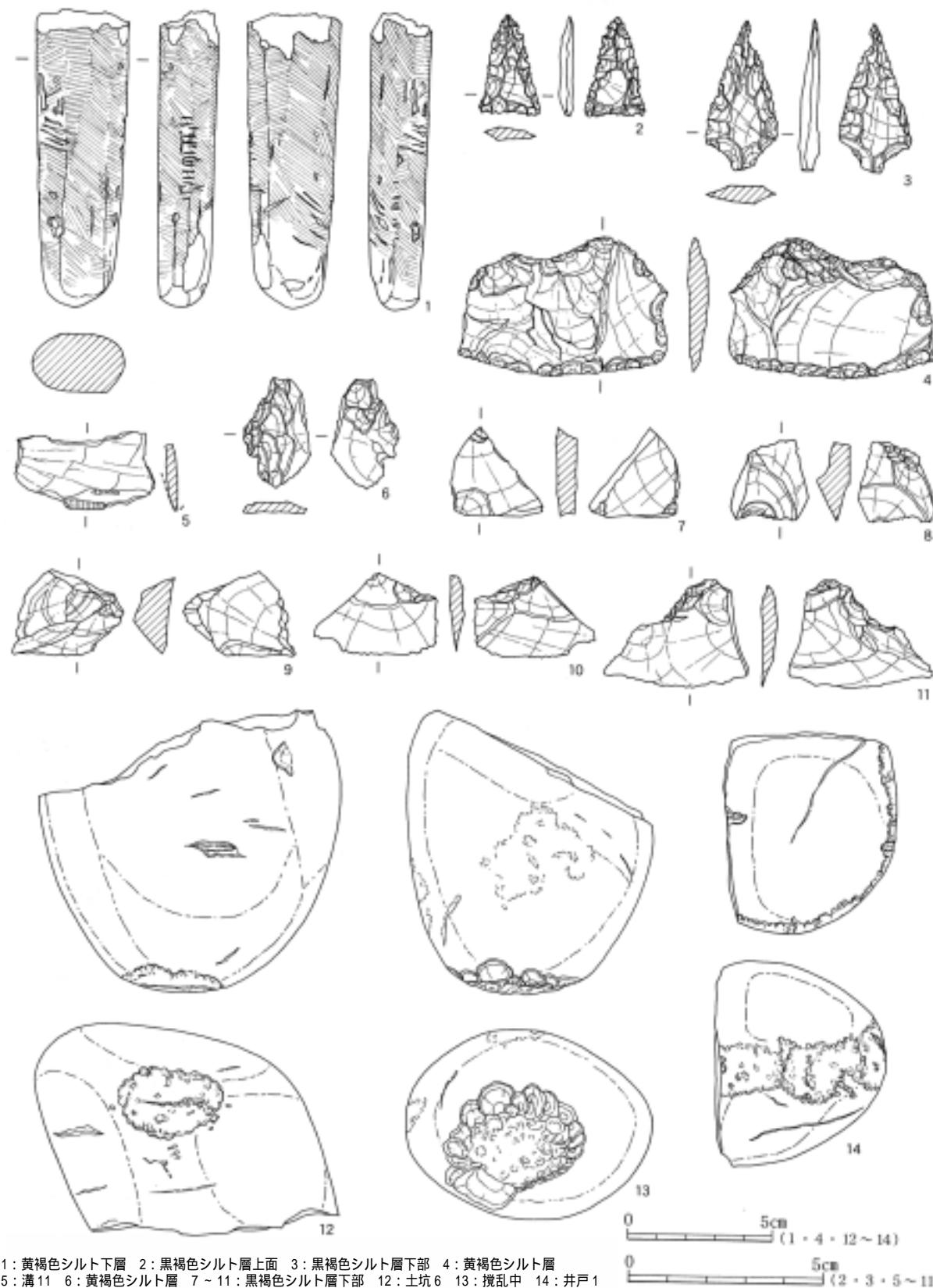


図111 石器

mm、3は長径3.9cm、内孔の径は4mmである。いずれも弥生時代中期の土器を加工して制作されたものであり、当該期のものであろうと推測される。

(3) 弥生時代の石器

石器類は図111に示した。石棒、石鎌、刃器、磨製石器片、剥片、敲石がある。

石棒 1は緑色片岩製の磨製石棒で、途中で欠損している。残存長は10.3cm、最大幅3.2cmである。先端部に向かい幅を狭め、円形に近くなるが欠損部付近では扁平な橢円形状を呈する。暗褐色シルト下層より出土しており、弥生時代前期前葉と考えられる。

石鎌 2はサヌカイト製の平基式石鎌で、長さ2.6cm、幅1.6cm、重さ1.1gをはかる。黒褐色シルト層上面より出土している。3はサヌカイト製の有茎式石鎌で、長さ3.9cm、幅1.9cm、重さ2.7gをはかる。黒褐色シルト層下部より出土しており、2とともに弥生時代中期に属するものと考えられる。

刃器 4はサヌカイトの比較的大きい剥片の側縁を細部調整し不定形刃器としたものである。最大幅7.1cm、最大長4.7cm、重さ27.0gを測る。黄褐色シルト層中より出土しているが混入と考えられる。

石器片 5は斑れい岩製の石器片で端部に磨かれた痕跡が残る。溝11埋土中より出土し、弥生時代前期後葉と考えられる。

剥片 6・10・11はサヌカイト剥片である。7・8・9はサヌカイト石核である。7は一部に自然面を残している。6は黄褐色シルト層中より出土しており弥生時代前期後葉と考えられ、他は黒褐色シルト層下部から出土しており弥生時代中・後期と考えられる。

敲石 いずれも、ひん岩製である。12・13は扁平な円礫の頂部に敲打痕が残る。14は円礫の稜線部周囲に敲打痕が残る。12は土坑6、14は井戸1より出土している。弥生時代中期に属する可能性が高い。

4 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構として確認できたのは竪穴住居、井戸である。このほか時期は不明ながら、当該時期の可能性の指摘できる遺構としては掘立柱建物、土坑、柱穴があり、これらについても併せて報告する。

(1) 中期の竪穴式住居

住居1は調査区の東半部で検出された(図112)。方形の竪穴住居跡である。主軸は南北方向(磁北)から約25度東に振れており、規模は北辺での計測値4.4m、西辺での計測値4.7mである。住居の中央を東西に搅乱が横切り、床面からの立ち上がりは平均10cm程度で、竪穴の残存度は低い。柱穴は西側の2箇所で確認できたが、東側では未確認に終わった。このほか床面には3箇所に小規模な掘り込みが認められた。このうち北側の2箇所は切り合い関係にある(なお検出時において北辺の中央部には張り出し状にみえる落ち込みがみられたため、ここに竈等の施設を想定したが、この落ち込みは弥生時代の土坑9と判明した。本住居とは無関係である)。

床面の北半部一帯には炭や焼土塊の散在する状況がみられたが、炉や竈等の施設は確認できなかった。床面に接して甕形土器と高杯が各1点出土した(出土地点は図112に点で示したとおり)。これら2点はほぼ完形に復元しうるだけの破片が揃っていた。

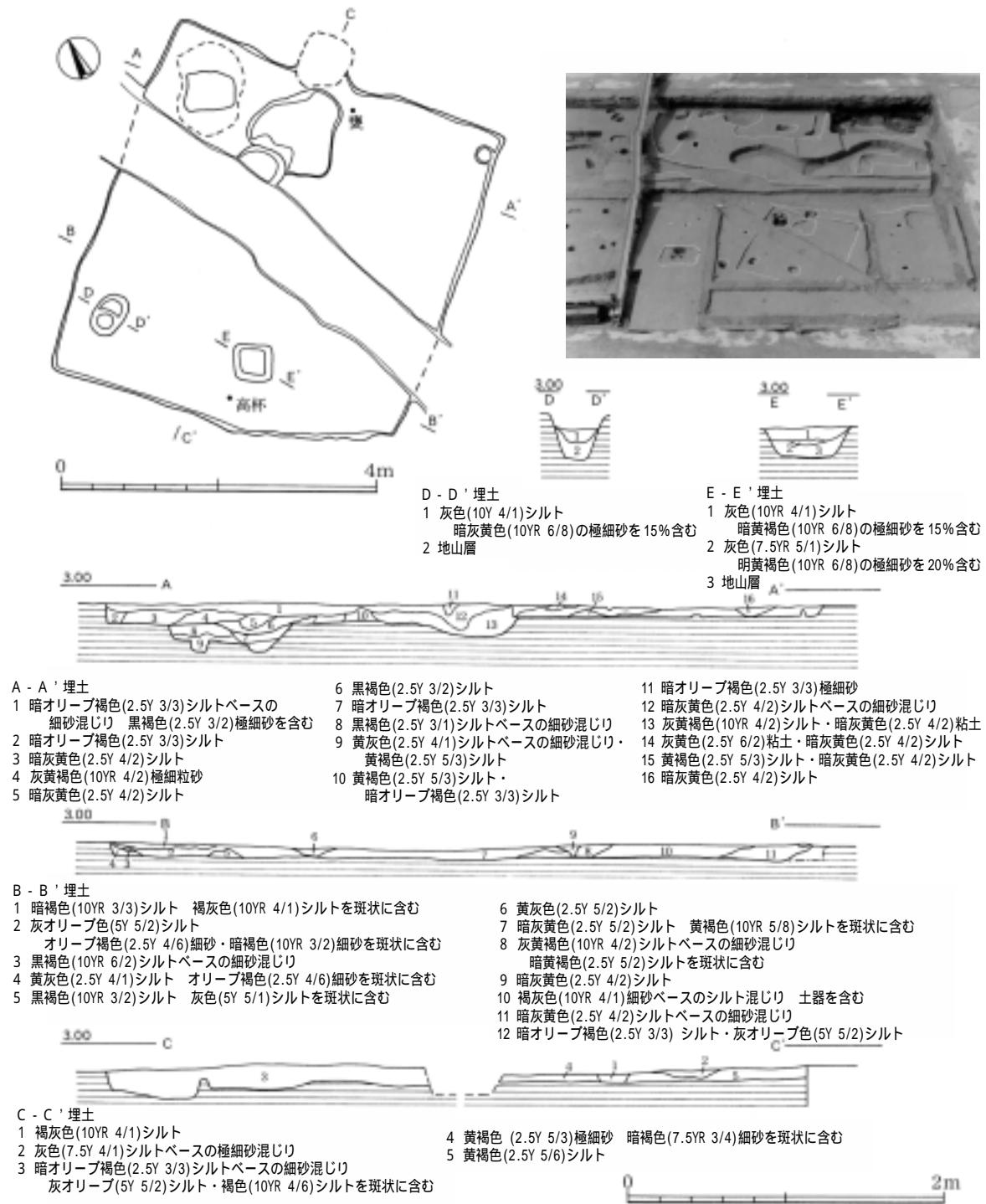


図112 住居1の状況

(2) 中期の井戸

調査区全体で井戸は3基発見されたが、すべて当該時期のものである。

井戸1 井戸1は調査区の北辺C4グリッドにおいて、その南半部を検出した（図113）。全体の平面形は不整円形になるものとみられ、その規模は東西1.7m、検出面からの深さは92cmである。掘り込みは2段になっており、検出面から50cm前後下方のところで幅15cmから25cm程度のテラス状の緩斜面をもつ。底部は平坦で、直径75cmほど円形になる。底面の標高はT.P.2.08mである。底から約30cm上

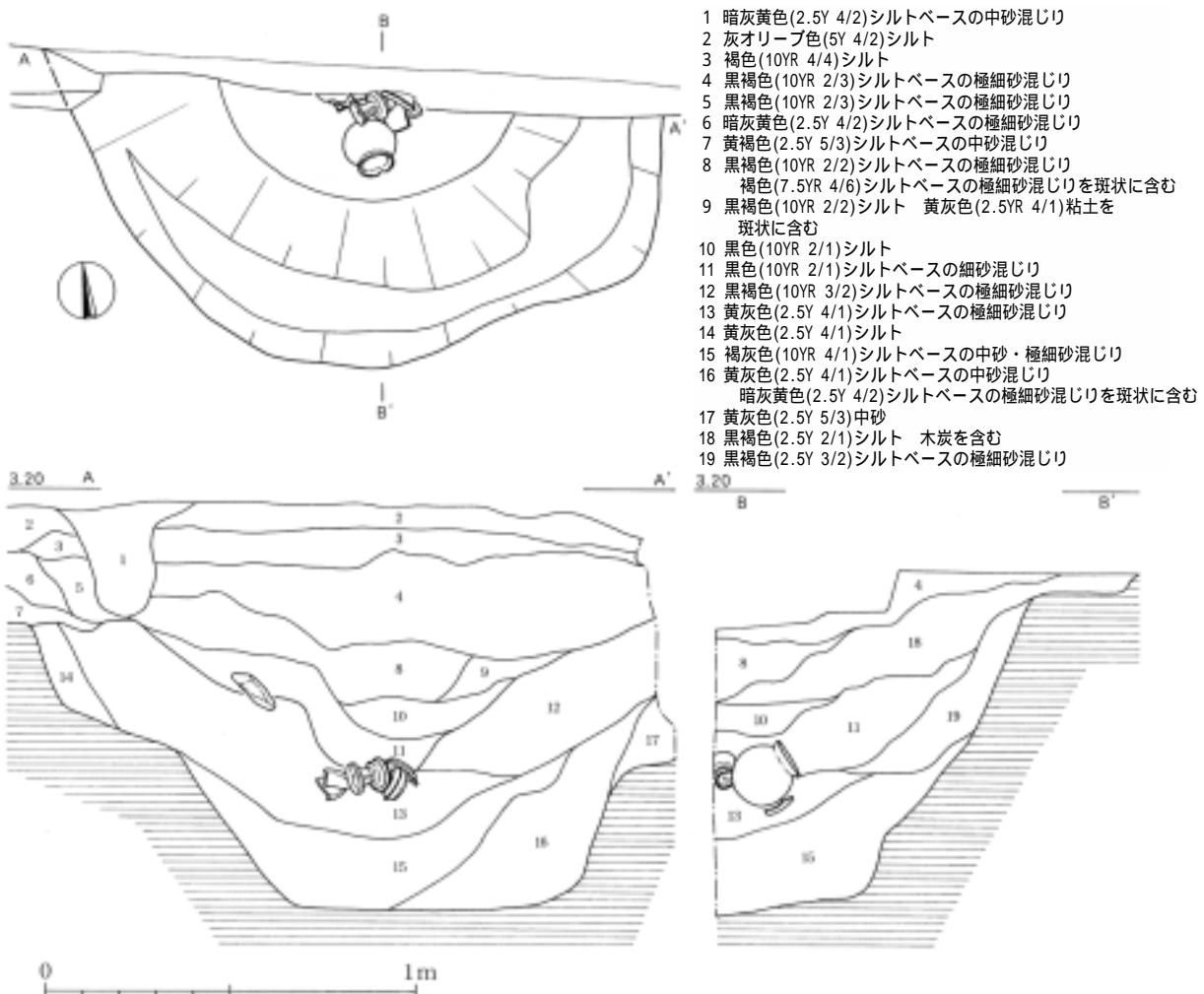


図113 井戸1の状況

方の埋土中からは土師器・須恵器が10個体前後まとめて出土した。器種は甕と杯(椀)、高杯で、いずれの器種についても土師器と須恵器とが組み合わせをなす点が注意を引いた。

埋土中からは、これら土器類とともに多量の炭や板石、桃の種、焼土塊の混入がみられた。

井戸2 井戸2は建物1の西壁にあたる場所で検出された(図114左)。平面形は橢円形ないし不整台形を呈し、検出面での規模は長軸1.2m、短軸80cmである。掘り込みは北東側を除き2段になっており、検出面から下方35cm前後のところ若干のテラスをもつ。底面はほぼ平坦で、その寸法は長辺50cm、短辺45cm、底面の標高はT.P.2.08mである。底から約30cm上方の埋土中には多量の炭化物を含む層があり、炭化物とともに土師器の高壺や甕形土器が出土した。土器片はさらに上方の埋土中からも散見された。

井戸3 この井戸は調査区の北側中央付近において竪穴1を切る状態で発見された(図114右)。平面形は橢円形を呈し、検出面での規模は南北1.2m、東西1.1mである。掘り込みが深く途中から湧水が顕著になったためと、下方の基盤層が粘土層であったために遺構の識別は難航したという経緯があり、掘り込み状態や床面の形状等についての詳細は不明である。

検出面から下方1mのところでは、土師器の甕形土器が4個体、整然と並べられた状態で発見された。さらに30cm下方からも別の甕形土器が1個体出土している。なお、いま示したような遺物の出土位置

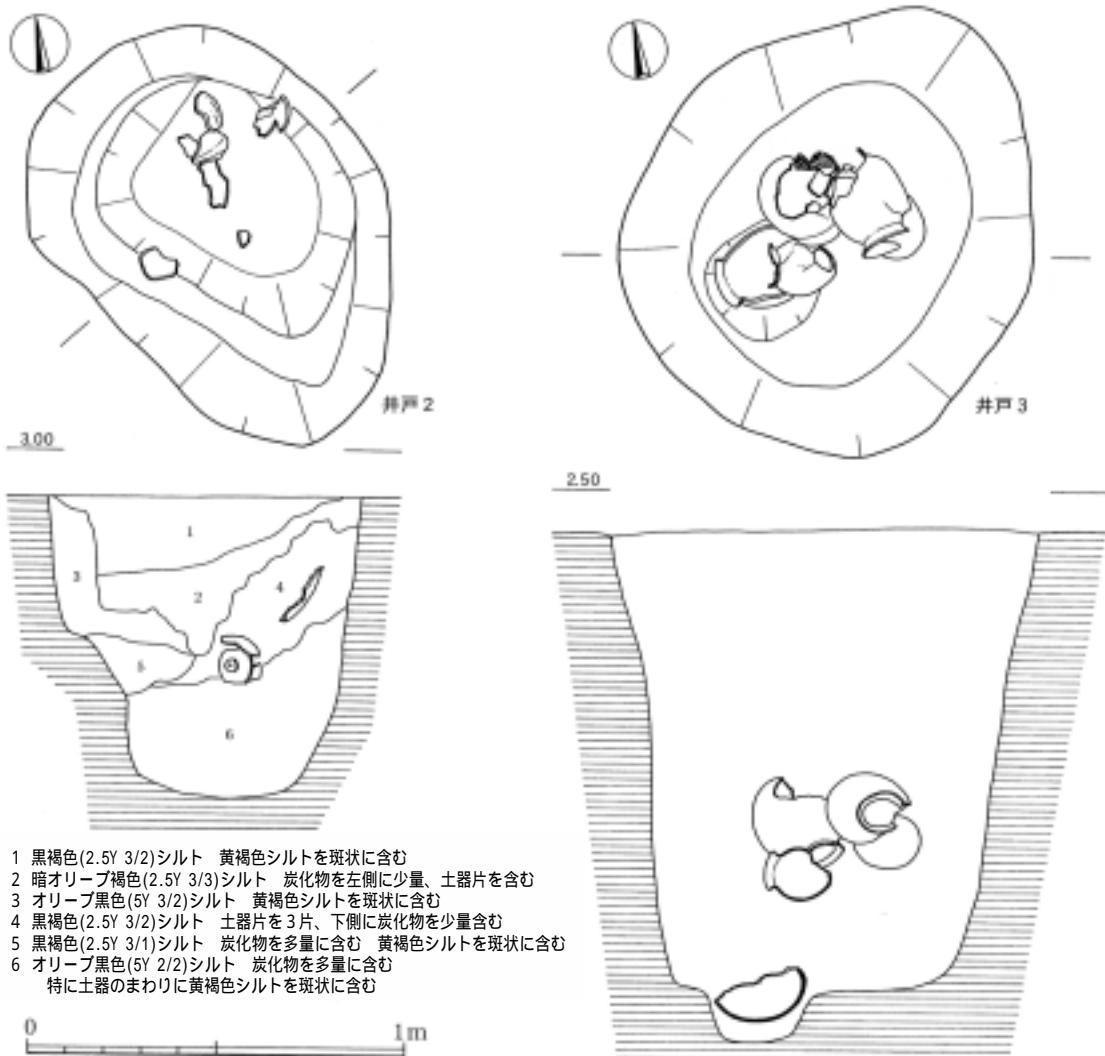


図114 井戸2・3の状況

や掘削中の手触りの微妙な差を手がかりとし、底面の標高は1.0m前後であろうと推定した。

(3) 時期不詳の建物および柱穴

建物1 この建物跡は調査区の中央部や南側で検出された(図115)。桁行3間、梁間1間で、棟方向は東西方向を向く。その主軸は磁北から約80度西に振れている。柱間は桁側が狭く1.6~1.8m、梁側が広く2.5~2.6mである。柱穴の直径は42~70cm、うち4基については内部に柱痕が確認された。柱の直径は22~28cm程度である。時期は不詳であるが、井戸2と一部重なる位置にあることから、これよりも新しくなる可能性が考えられる。

建物2 建物2は、調査区の北辺において検出された2基の柱穴(柱穴45・46)が組み合わせをなす可能性の高いことから、その存在を推定したものである(図99)。2基の柱穴の平面形は、一方が不整円形で一方が方形であるが、ともに2段の掘り込みをもつことと、柱痕の直径がいずれも20cm前後あり、他の柱穴にくらべて大型である点、および柱穴の深さがほぼ等しいことなどが共通点として指摘できる。そのため、これら2基はひとつの建物の柱跡であったとみなされる。調査区内において他にこれらと対になるとおぼしき柱跡はみあたらないので、2基を梁間とし、調査区の北側に広がる南北主軸の建物が

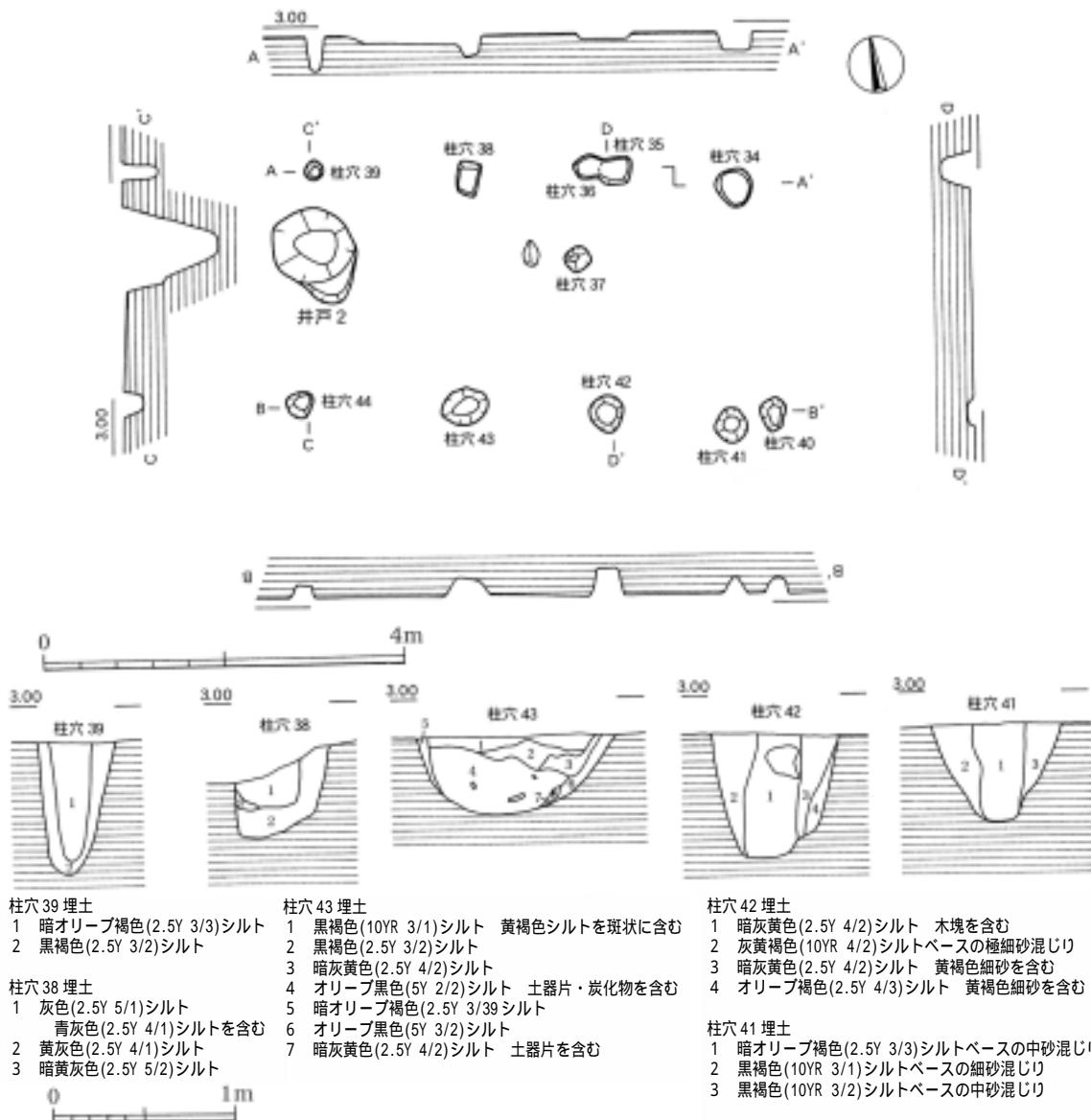


図115 建物1の状況

存在したものと考えられる。この建物2についても時期は不詳である。

このほか、建物の推定は不可能であったが、柱穴は4基確認された（柱穴47～50）。このうち柱穴47では柱痕が確認され、先端が尖り気味に丸く納められた直径13.4cmの柱跡が確認された。

(4) 時期不詳の竪穴および土坑

時期不詳の竪穴1基、土坑2基がある。これら各遺構からの出土遺物は土器片であるが、すべて細片であり、年代推定の根拠となる要素がほとんどない。検出面の層位や埋土の色調等からみて、古墳時代の中頃までのものであろうと推定されるにとどまる。

竪穴3 本竪穴は、C9・C10グリッドで検出された浅い掘り込みである（図99）。平面形はやや乱れた方形を呈し、東西幅5.0m、南北1.9mをはかる。南東隅から約1.5m西に寄ったところには南に向かって延びる1条の深い溝がみられたが、この溝の意味するところは不明である。このほか竪穴の内部には方形の土坑17が掘られており、その規模は東西1.2m、南北1.1m、深さ45cmである。埋土中からは

土器の細片がまばらに出土した。弥生土器が主体であり、このなかに年代判定の基準としうるものはなかった。層位的にみて、古墳時代中期頃までのものであろうと判断した。

土坑 土坑10はD2グリッドで検出された平面長方形の掘り込みである（図100）。南北主軸で北側は搅乱のために消失しているが、搅乱の北側までは続かない。現状で南北2.1m、東西1.1m、深さ21cmの規模をもつ。埋土中に遺物はなかった。土坑11は調査区の北辺で南半部を検出した（図100）。本土坑も南北主軸の長方形を呈し、現状で南北1.8m、東西1.1m、深さ5cmをはかる。埋土中に遺物はみられなかった。これら2基の土坑は、ともに主軸が南北を向くことや、規模が近似していることからみて、相互に関連性をもつ可能性が指摘できる。

5 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物としては竪穴式住居や井戸出土の土器、および包含層出土の土器類がある。

住居1出土土器 土師器甕と高杯がある（図116）。1は土師器甕で口径15.5cm、胴部最大径23.8cmをはかり、高さは30.0cm前後に復元できる。口縁部は外反しつつ立ち上がり、端部は丸くおさめる。胴部はなだらかに下り長胴である。口縁部外面から頸部やや下の胴部上端部まで横ナデ、胴部外面は縦ハケであるが、胴部最大径付近から上と下ではハケメ原体が異なり、上半は粗いハケメである。底部は横ハケで、胴部・底部で3段階の成形を行ったことが認められる。内面の上半はナデ、下半は粗い横ハケで

ある。2は土師器高杯で口径22.3cm、脚底径12.7cmをはかり、高さ15.5cmである。杯部は下半に段をもち、外反しつつ立ち上がる。口縁端部はわずかにつまみ上げる。脚部は緩やかに外反しつつ下る。口縁部は内外面ともに横ナデ、他はナデ調整である。脚部内面上半には輪積み痕が残る。

井戸1出土土器 井戸1からは土師器、須恵器の比較的まとまった資料が出土している（図117）。1は土師器甕で口径13.1cm、胴部最大径16.5cm、高さ18.2cmをはかる。口縁部は頸部から緩やかに屈曲し、内湾気味に立ち上がる。口縁端部は面を形成し、内側へ張り出す。胴部は最大径を中央やや下半にもち、底部は丸い。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面上半は縦ハケ、下半部は板ナデと指ナデである。内面胴部上半はナデ、下半はヘラケズリで、底部はナデである。

上半部のナデは粗く、輪積み痕が観察できる。器壁も厚く成形・調整とともに粗い。底部付近と胴部下半に焼成後の穿孔がある。祭祀に用いられたものであろう。2は土師器甕の口縁部片で口径16.6cmに復元できる。口縁部のつくりは1と共通するが、内面頸部から下はヘラケズリである。3は頸部の破片である。内面頸部より下はヘラケズリである。1・2は口縁部の形態から布留系甕と認定できる。4・5は土師器高杯である。杯部は内湾しつつ立ち上がる椀形を呈し、脚部は直線的に下りつつ屈曲し「ハ」の字状に開く。4は杯部の屈曲付

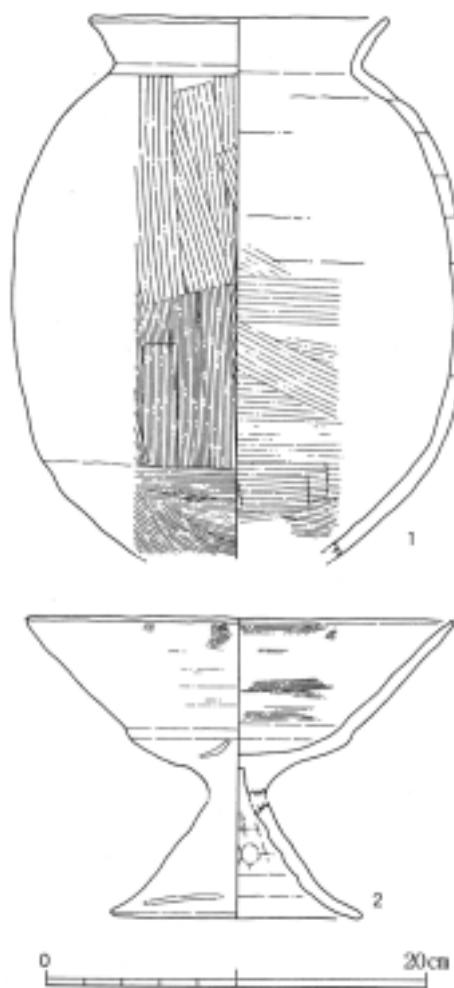


図116 住居1出土土器

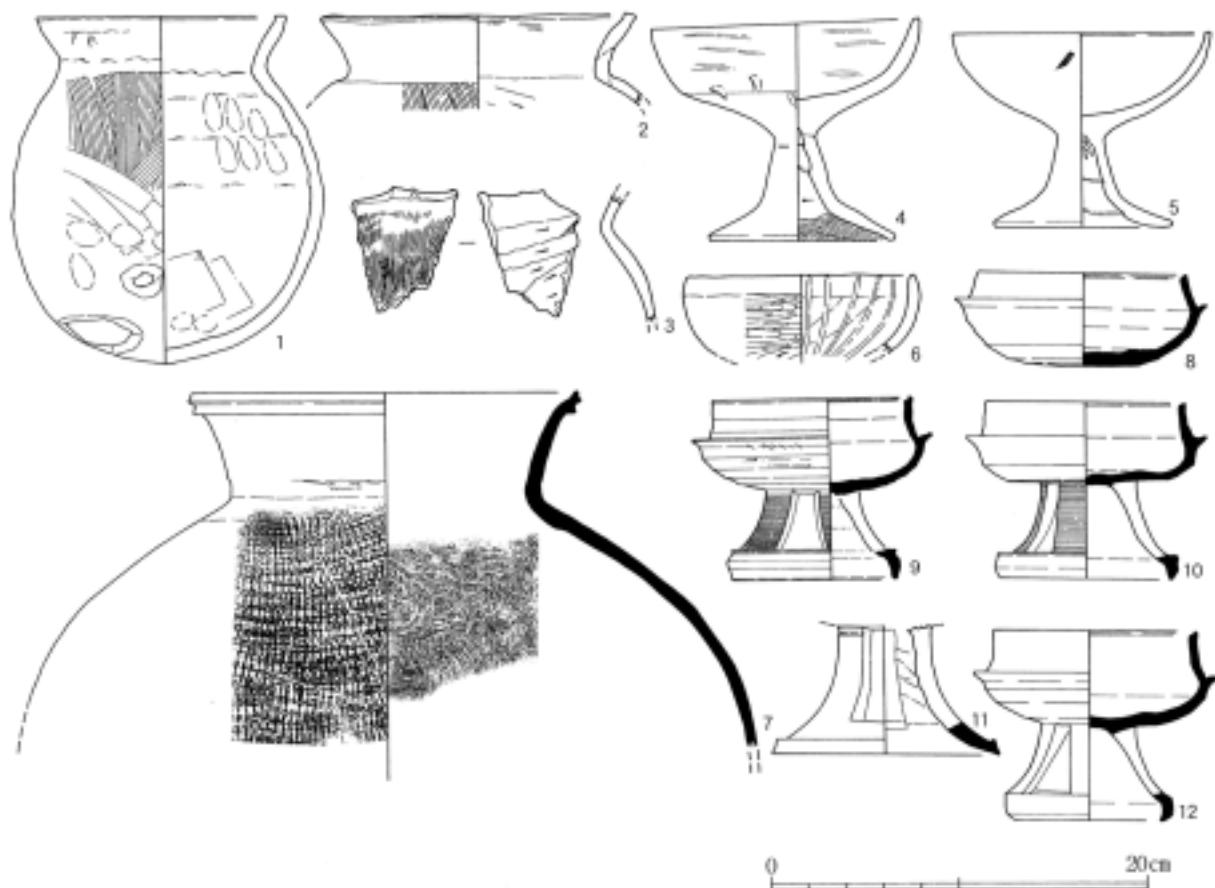


図117 井戸1出土土器

近より上に横ナデを行う。他の外面はナデであるが調整は粗く、杯部下半には成形痕を残す。脚部内面下半はハケメ、上半はヘラケズリを行っている。脚端部は内面側をわずかに横ナデし、面を形成する。杯部と脚部は別々に作り接合する。5の杯部は内外面ともにナデで、口縁端部は横ナデし、わずかながら面を形成する。脚部内面には輪積み痕が明瞭に残る。脚部を形成したのちに、脚部上端横から杯部を形成している。6は土師器の椀ないし高杯と考えられる。口縁端部に横ナデが見られるが、外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデの上に放射状のミガキを施す。7は須恵器甕で口径20.4cmをはかる。口縁部は段をもち、端部はつまみ上げる。口縁部・頸部はナデ、胴部外面は擬格子のタタキ、内面は同心円タタキをナデ消している。8は須恵器杯身で、口径11.0cm、高さ4.9cmをはかる。口縁端部には段を形成するが鈍く不明瞭になっている。外面体部上半から口縁部および内面は横ナデである。体部下半1/3は順回りのヘラケズリである。

9・10・12は須恵器有蓋高杯である。脚部の透かし孔はいずれも三方である。9は口縁部、受部などの端部が極めてシャープに作られている。立ち上がりは高く、受部も広い。外面のヘラケズリは順回りで受部近くまで施す。受部直下には横ナデの下に絞り目状の痕跡が見える。脚部にはカキメを施す。脚端部の上端に鋭い段をもち、下方へ「く」の字形に折れ曲がる。内面は横ナデである。3点中、もっとも端部のつくりが鋭く、丁寧である。10は9とほぼ共通するが、口縁端部は段を有さず面となり、脚端部にも段を有さないなど仕上げに鋭さが欠ける。12は口縁端部にはわずかに段をつくるがやや鈍く、面に近くなっている。脚部外面は横ナデで脚端部もナデで仕上げる。他の2点と比してやや深みがあり、仕上げに鋭さはない。焼成は10が最も良好で青灰色を呈し、断面は赤褐色になる。蓋は出土していない。

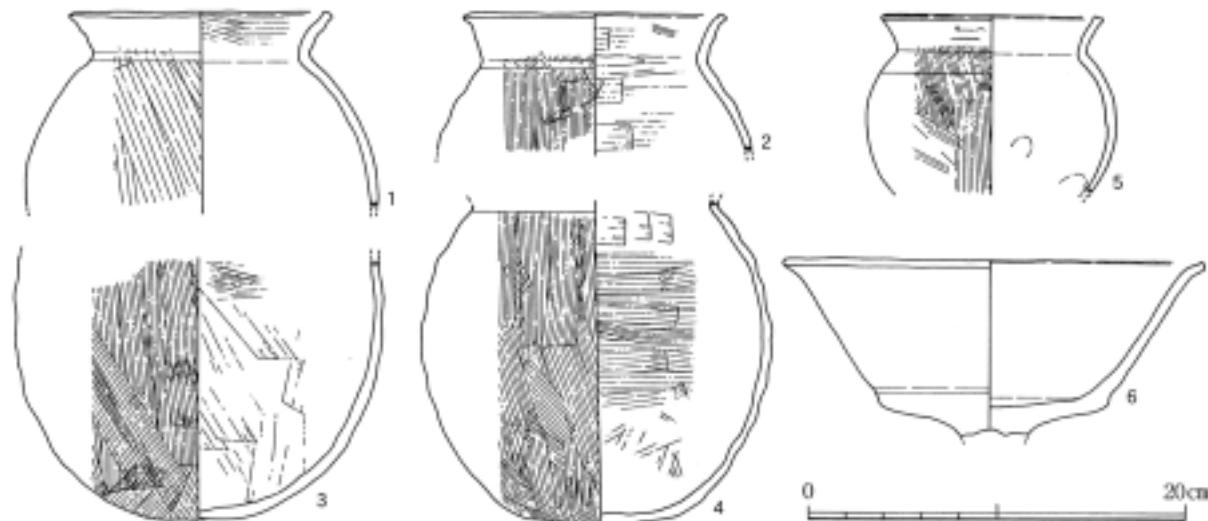


図118 井戸2出土土器

い。11は脚部1/4のみ残存するが須恵器無蓋高杯脚部と考えられる。脚底径は12.0cm、脚高は6.7cmをはかる。透かし孔間隔が狭く、四方透かし孔と考えられる。内外面ともに横ナデで脚端部は上下ともに鋭い。外面には自然釉が付着する。焼成は良好で断面は赤褐色となる。

井戸2出土土器 図118 - 1 ~ 4は土師器甕である。1は口径13.1cmに復元できる。口縁部は外反し、端部は肥厚させ外傾する面を作る。口縁部は内外面ともに横ナデするが、外面は胴部上端にまでおよぶ。胴部外面は粗いハケメ調整、内面はナデである。2は口径13.2cmに復元できる。成形・調整は1とほぼ同様であるが、口縁はやや直立し胴部の張りも少ない。内面にはナデ調整の下に横方向のハケメ調整の痕跡が見られる。3は胴部から底部である。胴部最大径は19.4cmに復元できる。外面は縦ハケ、内面胴部は板ナデ、底部はナデである。4は胴部最大径18.4cmをはかる頸部から下の部位である。上端部外面には横ナデが見られる。胴部・底部の外面は縦ハケ、胴部内面上半部はナデ、下半部は横ハケ、底部はナデである。5は土師器小型甕で、口径は11.6cm、胴部最大径は13.0cmをはかる。口縁部は外反するが、端部はつまみ上げ外傾面を作る。口縁部は内外面ともに横ナデであるが、外面は胴部上端にまでおよぶ。胴部外面はハケメ、内面はナデ調整である。6は高杯の杯部で、口径22.0cm、杯部高9.2cmをはかる。口縁部は外反し、端部は屈曲させてつまみ上げる。下半には段をもつ。口縁部は内外面ともに横ナデ、他はナデである。

井戸3出土土器 いずれも土師器甕の一括出土資料である(図119)。それぞれは、わずかずつ個性をもち、同一の形態をもつものはない。いずれも胴部最大径付近を中心に上半の肩部から底部上までの範囲にススが濃厚に付着する。1は口径16.1cm、胴部最大径21.1cm、高さ26.3cmをはかる。口縁部は緩やかに屈曲しつつ外反し、端部は強く外反し端面を作る。口縁部は内外面ともに横ナデする。胴部外面は縦ハケ、内面は板ナデを行う。板ナデはやや粗く輪積み痕が残る。底部内面はナデである。2は口径15.8cm、胴部最大径21.1cm、高さ25.7cmをはかる。口縁部は緩やかに外反し、端部は強く外反させ、わずかにつまみ上げる。口縁部は内外面ともに横ナデする。胴部外面は縦ハケ、内面上半はハケメのちナデ、下半はハケメ調整を行う。底部内面はナデである。3は口径15.5cm、胴部最大径21.3cm、高さ27.0cmである。口縁部は緩やかに外反し、端部は強く外反させたのち強くつまみ上げ、外面には面を形成する。口縁端部外面および口縁部内面は横ナデであるが、外面のナデは甘い。胴部外面は縦ハケで下

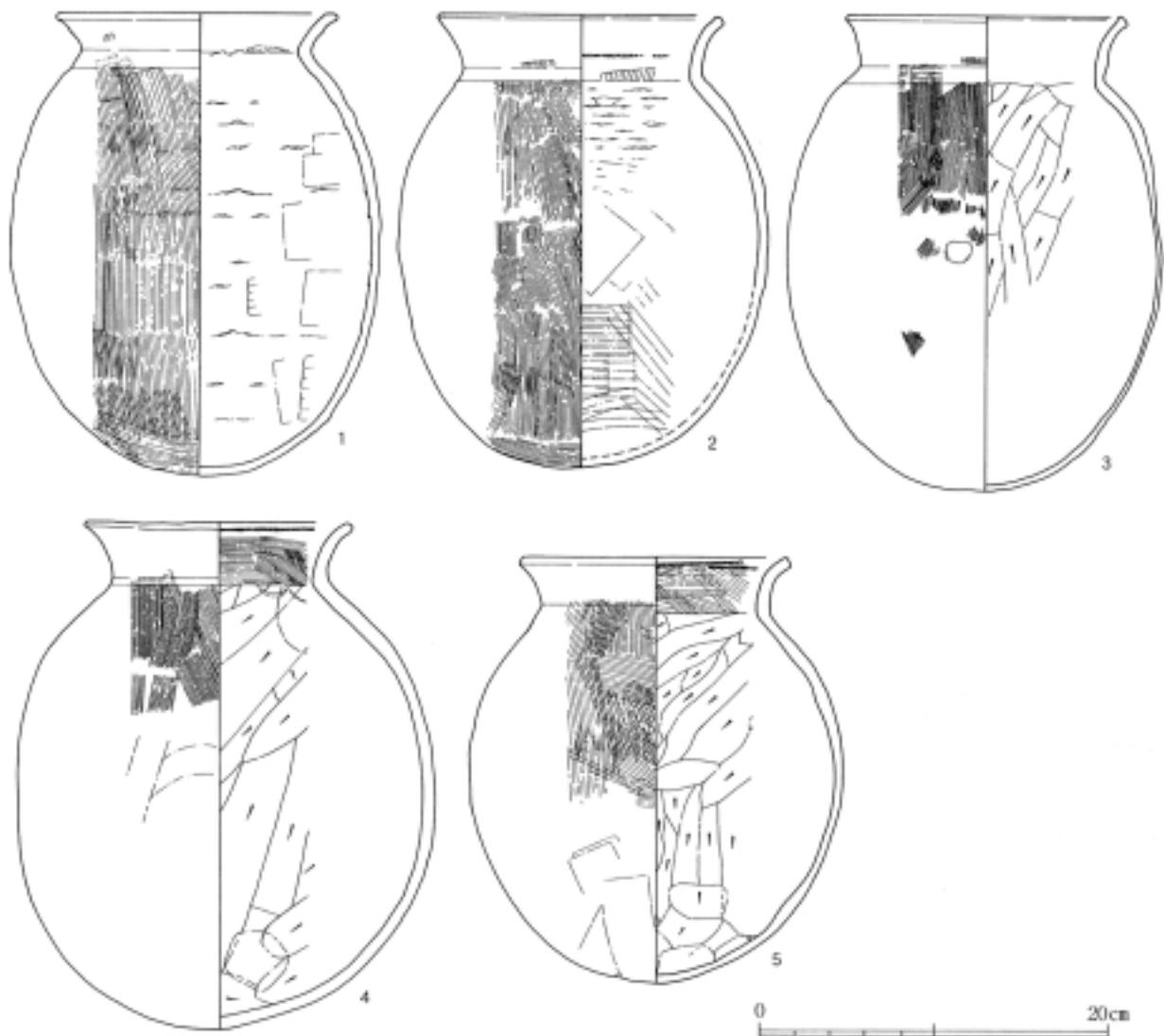


図119 井戸3出土土器

半から底部にかけては板ナデである。ハケメの条線は他の資料と比較して著しく細かい。胴部内面はヘラケズリ、底部内面中央はナデを行う。スヌは胴部上半に帯状に付着するが、部分的には口縁部にも付着する。他と比して著しく器壁が薄い。4は口径14.8cm、胴部最大径23.8cm、高さ28.8cmをはかる。頸部の径が共伴の他例より細く、口縁部に向かって強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。胴部最大径は胴部下半にある。口縁部外面は横ナデ、内面はハケメ調整で、端部のみ横ナデする。胴部外面上半は縦ハケ、下半～底部外面は板ナデである。胴部内面はヘラケズリ、底部中央はナデである。器壁が厚く重い。5は口径15.0cm、胴部最大径21.2cm、高さ24.2cmである。口縁部は緩やかに立ち上がり、端部は直立し、外面に面を形成する。口縁部外面は横ナデ、内面は端部付近までハケメ調整である。胴部外面のハケメは頸部からはじまり、底部外面は板ナデである。胴部から底部の内面はヘラケズリである。スヌは底部を除き、口縁部上端までの全面に付着する。

土器の年代的位置 第10次調査では以上にみてきたように住居1、井戸1～3の各遺構からは5世紀後半の良好な一括資料が出土した。このうち、まず井戸1では須恵器が共伴する。杯身や有蓋高杯はTK23型式に位置づけられるが、中には端部が鋭く丁寧なつくりのものも含み、この型式の中では古く、

TK208型式に近いものと考えられる。さらに、井戸1出土の土師器甕は口縁部が内湾し、端部に面をつくる布留系の要素を残している。井戸2出土品では土師器甕が長胴化せず、小型甕は第9次調査の溝1出土資料に近い。また高杯は布留系大型高杯であることなどから、井戸1と同段階に位置づけるのが妥当であろう。井戸3出土の土師器甕では口縁部が外反するものを含み、胴部の形態は長胴化をはじめており、井戸1・2よりは新しく位置づけられるであろう。また住居1の土師器甕については、口縁部が直立し、胴部に膨らみをもたずに長胴化する傾向がみられ、土師器高杯についても井戸2出土例と比較したとき、杯部の段が緩やかで、高杯口縁部は屈曲せず端部の調整がより簡略化されるなどの状況がみられる。こうした様相をみれば、住居1の資料は井戸2より後出し、井戸3と同じか、さらに1段階新しくなる可能性がある。以上の各遺構から出土する土師器甕を概観すると、その型式学的变化は、口縁端部の面が水平から立ち上がる方向と、胴部の長胴化の方向へと向かうと考えることができる。

いずれにしても、最も新しいと考える住居1の資料もいまだ布留系大型高杯が伴うことから、これらの資料は須恵器のTK23型式段階前後の5世紀後半から大きくはずれない短期間の資料と考えられる。
包含層出土遺物 包含層出土の土器として各種の須恵器があり、その代表的なものを報告する(図110-26~30)。26は杯身で口径12.0cmに復元できる。口縁端部の段はほとんど痕跡だけで面状になる。受部も鋭さに欠ける。TK23ないし47型式と考えられる。27は杯身で口径15.4cmに復元できる。口縁部はやや内傾し、端部は丸くおさめる。MT85ないしTK43型式に位置づけるのが妥当であろう。28は甕口縁部と考えられる。口縁端部は緩やかな段をつくり、つまみ上げる。口縁部下には整った波状文を描き、その下に段をもつ。内面は横ナデを行う。ON46型式に位置づけられる可能性をもつが、細片であるため断定はできず、TK208型式までの幅で位置づけるのが妥当であろう。29は高杯脚部で、脚底径11.1cmをはかる。透かし孔は三方である。脚部外面調整は力キメで、他は横ナデである。脚端部のつくりは鋭い。焼成は良好で青灰色を呈し、断面は赤褐色である。TK23型式と考えられる。30は高杯や器台などの脚部と考えられる。脚底径は22.0cmに復元できる。6世紀後半であろう。

6 古代・近世の遺構

(1) 古代の土坑

土坑23はD5グリッド杭の位置で検出された。南北55cm、東西35cmの楕円形を呈する小規模な掘り込みであり、その東側の脇に須恵器の杯身1個体が伏せられた状態で出土した。今回の調査において、古代の遺構と認定しうるのはこれが唯一のものである(図120)。



図120 土坑23の状況

(2) 近世の溝

この時期の溝は調査区全体で6条検出された(図121)。南北方向に延びる溝が2条(溝8・9)、東西方向に延びる溝が3条(溝10・11・12)。また調査区の西半部で東西方向にはしり、東半部で大きく曲がって南へと延びる溝が1条(溝13)である。幅はもっとも広い溝11で2

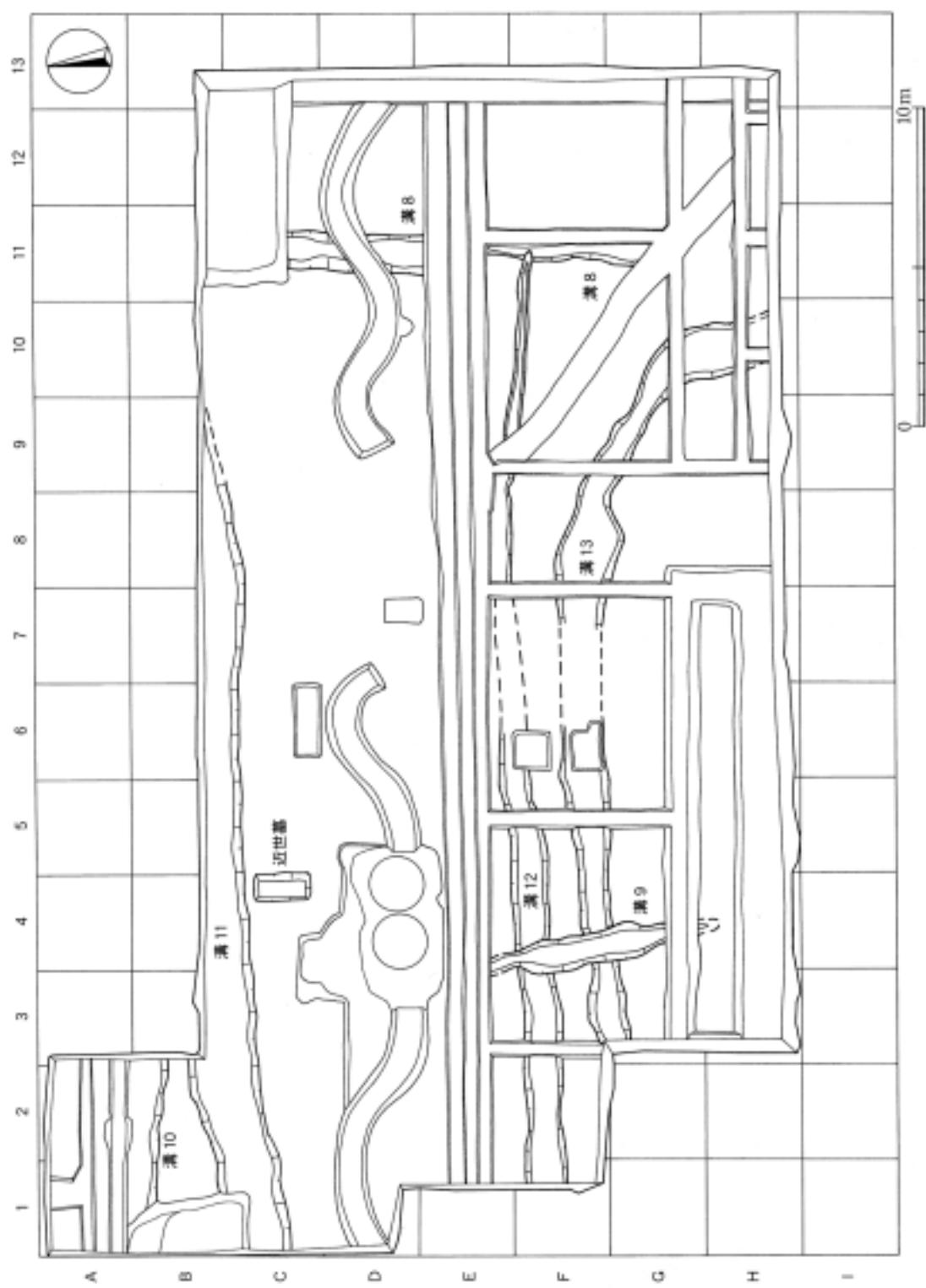


図121 近世の遺構配置

前後、もっとも狭い溝12の東半部において30cmとばらつきが大きいが、幅1m前後のところが多い。断面形は緩やかな逆台形ないし「U」字形であるが、深さはすべて10cmから20cm前後におさまり、非常に浅い。

すべての溝の埋土は2層の黄褐色粘土層と同質で、水田耕土の下層部分にあたる。遺物もほとんど検出されなかった。こうした状況からみて、これらの溝は近世の水田にかかる遺構であろうと推測される。

ちなみに東西にはしる溝については、2条で1単位をなすようにもみえる。絵図面等の資料によれば、近世水田の耕作単位は細長い短冊状を呈する場合が多く、先の単位は、こうした耕作単位の区画に対応する可能性も指摘されるところである。ただし、2条の溝に挟まれた位置に畦畔などの施設が存在したか否かについては解明できなかった。

(3) 近世の木棺墓

この埋葬は調査区の北側において単独で発見された(図122)。掘り込み面は1層上面であり、水田の

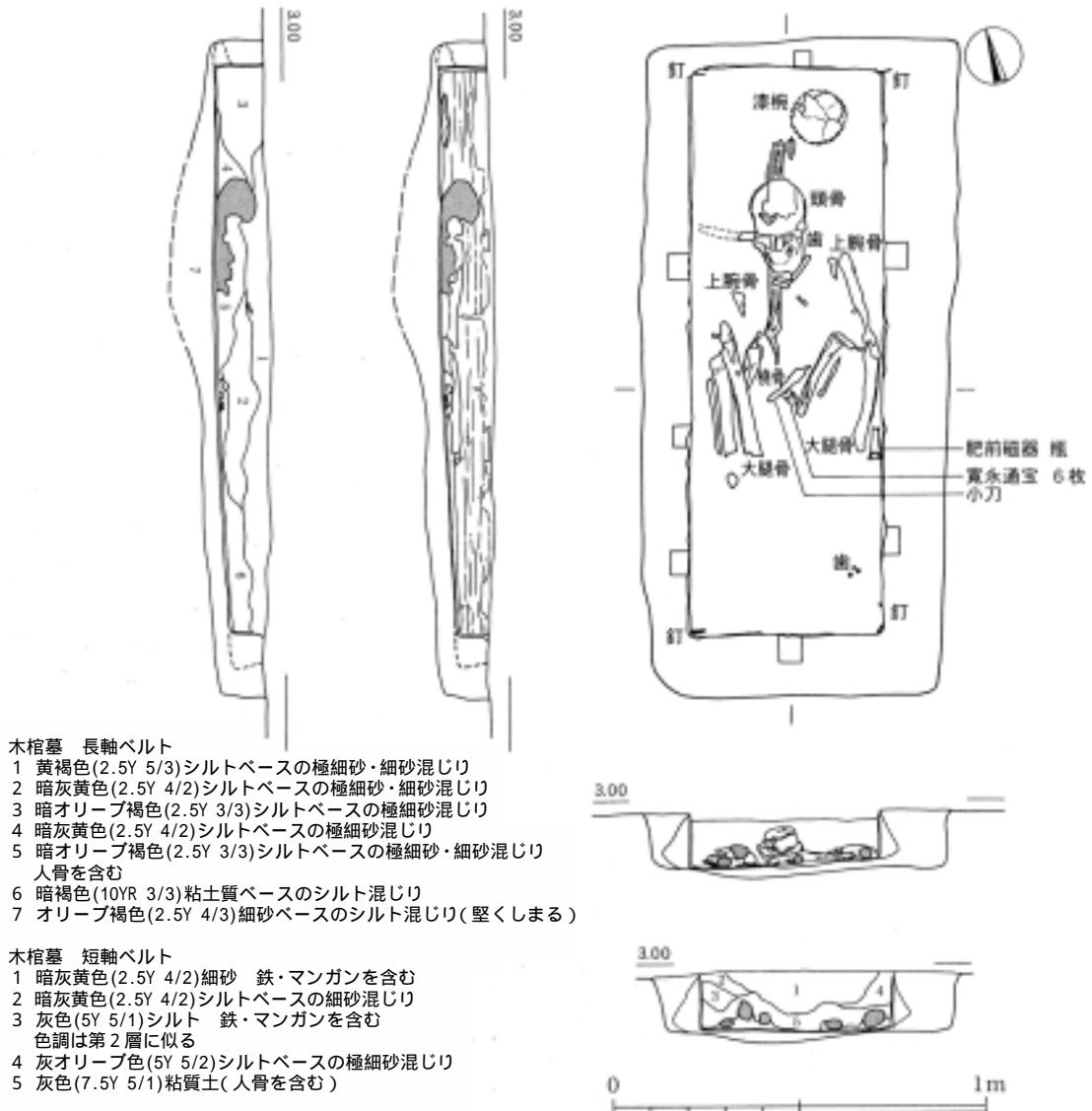


図122 近世墓の状況

耕作土中にあたる。掘り方の規模は南北1.77m、東西83cmの長方形を呈しており、深さは北半部の一部がもっとも深くなっている。その場所で検出面から27cmをはかる。内部には長方形の組合せ式箱形木棺があさめられていた。その規模は長辺1.53m、短辺51cm、現状での高さ15cmである。棺の接合には釘が用いられており、側板から小口板へ打ち込まれた状態のものや底板から側板に打ち込まれた状態のものが小口部を中心に数か所で観察された。釘の状態から復元される棺材の接合関係は、底板の上に側板が乗り、長側板が小口板を挟み込む形態である。本木棺の構造において注目されるのは、棺の外側に合計7カ所の突起が設けられていることである。突起の平面形は方形で、いずれも長さ10cm前後、幅約12cm程度である。板材同士の接合関係は不明瞭ながら、底板の突起ではなく、棺の底部に渡された角材でもなく、側板にまでおよぶ明瞭な立ち上がりを有するものであった。この突起は両小口部に各1カ所、西側長辺3カ所、東側長辺には2カ所で、長辺側において左右対称ではない。

棺内には遺骸とともに副葬品が添えられていた。頭骨は北側に置かれており、北枕に葬られたことがわかる。埋葬骨は粘土化した状態で取り上げ不能であり、性別、年齢等の判定には制約を受ける状態とは思われたが、頭骨（歯を含む）と四肢骨の同定は可能であり、それら全体が棺の中心付近に集まっている状態であった。本学医学部解剖学第一講座教授石村和敬氏に部位の同定と埋葬姿勢についての観察を依頼した結果、部位の配置状態の概要を知ることができた。その同定結果は図122に示したとおりである。埋葬姿勢については四肢を折り曲げた屈葬の形態をとっていた可能性が高いとのご教示をえた。また遺存した歯については本学歯学部第2口腔解剖学講座教授石塚寛氏、同助教授樋浦明夫氏に検定を仰ぎ、次のような所見をえた。

- 1 頭骨付近に列をなして遺存した数個の歯のうち、同定が可能な3点は左上顎の大臼歯であるが、配列が逆転しているものがあり、上顎骨に遺存したものではなく、一旦抜け落ちたものが列をなすように遺存したものと考えられる。
- 2 足下付近から出土した3点の歯は左上顎の側切歯と犬歯、および左下の犬歯であり、先の2点は自然な配列を示しており、顎骨内に納まった状態であると考えられる。
- 3 すべての歯とも咬耗が顕著で、歯隨の露出しているものもみられるほか、犬歯や側切歯の咬合状態は、この人物が鉗子状交合であった可能性を示唆する。また大臼歯3点には虫歯がみられる。
- 4 性別、年齢については不詳であるが、咬耗が相当程度伸展していること、ただし歯の状態が老化していない点からみると、壮年期の可能性は指摘できる。

調査時に最大の問題となったのは足下付近出土の歯の解釈であったが、上記の所見を勘案すると、副葬品とも考えがたく、また別の被葬者を想定するのも困難なようである。したがって、これらの歯については同一人物のものと判断し、埋葬後に左側下顎骨付近の部位の一部が小型動物等の活動の結果、足

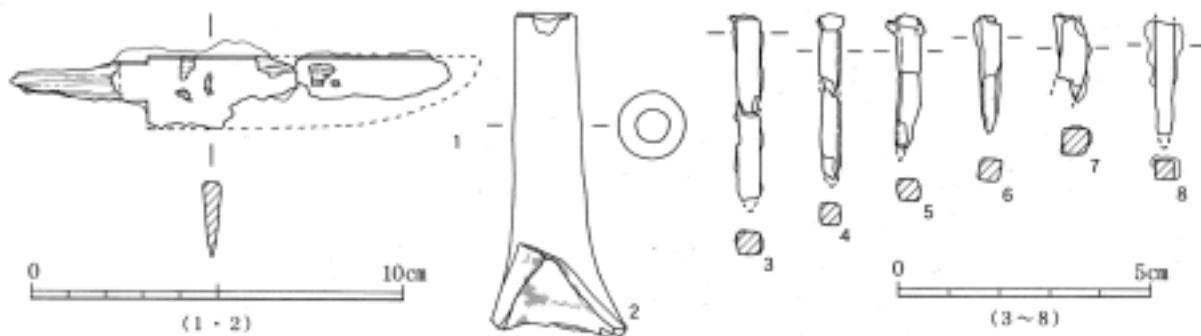


図123 近世墓の遺物

下へと移動したのではないかと説明づけておきたい。

頭骨の北側には漆塗りの椀が1つ供えられ、腰の上には小刀1振と寛永通宝6枚が重ね置かれていた。また左腕の脇には、欠けた瓶の口が添えられていた。これら副葬品の内容や年代からみて、埋葬時期は18世紀代の江戸時代後期と推定される。

本例は、江戸時代における水田内への埋葬事例のひとつに数えられよう。四国の吉野川流域各地では近年でも同様の習俗は認められるので、この地域独特の習俗が、近世段階においていかなるものであったのかを示す良好な資料として位置づけられるに違いない。

7 近世の遺物

(1) 墓の遺物

墓出土の遺物としては刀子、六道銭、瓶の口、漆椀がある。これらのほかに木棺の接合に用いられた鉄釘類が加わる。図123には刀子と瓶、および鉄釘を示した。

1の刀子は現長11.8cm、刃部幅2.0cm、刃渡りは本来9cm程度であったと推定される。木製の柄と鞘に納められており、関の形態は両関の可能性がある。日常使用の小刀であろう。2は瓶の口である。肥前系磁器で、破断面と内面の一部には付着物があり、漆の可能性がある。年代は18世紀代。瓶の本体から分離して、この口だけを副葬品として遺骸の脇に添えていた。墓の年代は本資料にもとづいて推定した。

鉄釘は鎧による劣化のために取り上げの不可能なもの多かった。図示したものはかろうじて取り上げえたものである。平均的な寸法の3で寸法の概要をみると、全長は3.4cm、断面は方形を呈し、中央部での厚さ4mmをはかる。いずれも非常に短い釘であり、これによって接合可能な棺材は厚さ2cm程度のものでしかない。ごく薄手の木棺を推定せざるをえないことになろう。

漆椀は赤漆塗りの容器であるが、土圧のために現状では径14cm、深さ2cmの皿状を呈する。皿ないし椀であろうと推定されるが詳細は不明である。六道銭はすべて寛永通宝であろうと思われ、6枚が重なった状態で鋲び付き、現時点では分離しておらず、1枚ごとの観察はなしえない。

(2) 包含層中の遺物

なお黒褐色シルト層中からも若干の近世遺物が出土した。図124には近代の可能性のあるものを含め、

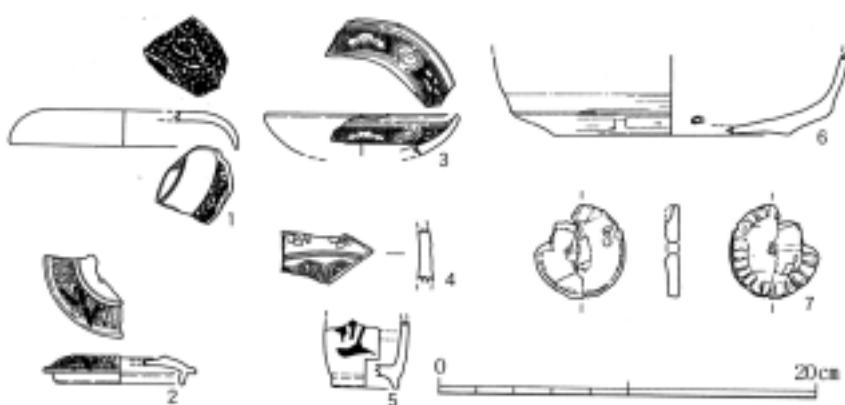


図124 近世・近代の遺物

それらのいくつかを示した。

1は肥前系磁器で蓋付き碗の蓋である。推定口径は12.2cm。18世紀後半のものと思われる。2は陶器の蓋で推定径は6.7cm、生産地、年代ともに不明である。3は肥前系陶器の鉢である。18世紀前半に遡る可能性をもつ。以上の資料のほかに、明治期にまで下る可能性のあるものとして3、5～7までの資料がある。3は瀬戸・美濃系磁器の皿で内面には銅板転写による染付が施されている。年代は明治後半以降になる。5は瀬戸・美濃系磁器の瓶で近代のもの。6は陶器の鉢で製作地年代ともに不詳。7は円盤形土製品で、玩具と思われる。年代は不明である。

第3節 調査成果のまとめ

今回の調査成果のなかで特に注目されたのが弥生時代の灌漑用水路と推定される溝の発見であった。またこれに関連して、地形的環境の変化にかんする新知見もたらされた。本節ではこれらの点についての所見を提示し、まとめとしたい。

(1) 弥生時代前期の灌漑用水路の発見

今回発見された溝の年代は弥生時代前期前葉で、この時期の本格的な灌漑用水路としては徳島県域での最古例である。もちろん四国地域でみても最古級となろう。いうまでもなく徳島県域での水稻農耕はこの時期から始まったと考えられており、今回の発見は、本地域での水稻農耕が当初から高度な技術水準にあったことを物語る。近隣諸地域において、たとえば近畿地方などではこのような状況は知られておらず、本格的な灌漑施設を備えるのは弥生時代前期後葉を待たねばならないようである。その意味で、今回のような発見は、四国の吉野川下流域における稻作農耕開始期の意外な実体を明らかにしたことになろう。

ところで庄・蔵本遺跡の場合には、第6次調査では四国地域最古の箱式石棺墓や甕棺墓、副葬品としての管玉が発見され、9次調査では弥生時代最古の腰掛けがみつかっている。灌漑施設などといった稻作農耕に直接かかわる側面に限らず、弥生文化を特徴づける諸要素が当初から備わっていたとみなしうる状況である。こうした新知見を勘案しつつ本地域における弥生文化の到来を考えるならば、いずれか他所において完成に近い状況にまで整備された諸要素の一括移植といった状態を推定せざるをえないのかもしれない。あるいは起源地を異にする諸要素がほぼ同時に到来したというような、連鎖的伝播が弥生時代前期前葉といった特定の時期に集中的に生じた結果であるのかもしれない。この辺の実体解明についてはなお十分な検討を要するが、いま示したような具体的な作業仮説の設定と検証が可能な段階に至ったことは間違いない。

(2) 地形的環境の変化と土地利用

今回の調査目的として設定した課題のひとつは旧地形の復元、および土地利用の変遷過程の把握であった。この点で、弥生時代前期後葉の洪水砂の堆積が確認されたことと、その後の土地利用の大幅な変化が認められたことは貴重な成果である。水稻耕作を主体とする同一の文化にあって土地利用の変化が認められる場合、その要因としてもっとも可能性の高いのは、地形的環境の変化と考えられるからである。今回のケースでは洪水が押し流した土砂の堆積によって調査地点の周囲は、弥生時代前期後葉の

ある時点を境に微高地化し、鮎喰川自体の流路も変化したものと思われる。その結果、弥生時代中期以後の灌漑用水路は別の場所に掘削されることになったのであろう。以後、調査地点一帯は集落域の末端として利用されたものと考えられ、古墳時代中期には集落域の内部に取り込まれるにいたる。

なおこの問題と関連して注意されるのが、当調査地点における弥生時代遺物の時期的な偏在性である。弥生時代前期後葉から中期初等の時期に属する遺物がもっとも多数派を占め、弥生時代中期後半から後期前半の遺物がこれに次ぐといった状況で、その他の時期の遺物は希薄である。このことは庄・蔵本遺跡における土地利用の変遷過程を時期別に整理する際の有効な指標となろう。

引用・参考文献（序章から第5章まで）

- 天羽利夫・岡山真知子 1974「鮎喰川下流域における弥生文化の展開 - 序論 - 」『徳島県博物館紀要』第5集
 一山典・滝山雄一 1985『第6回埋蔵文化財資料展 庄遺跡の人々のくらしと文化』（徳島市教育委員会）
 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII 下川津遺跡』（香川県教育委員会）
 片岡 宏二 1991「日本出土の無文土器系土器」『日韓交渉の考古学 弥生時代篇』（六興出版）
 近藤 玲 1996「阿波」『弥生後期の瀬戸内海 - 土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通 - 古代学協会四国支部第10回松山大会資料』（古代学協会四国支部）
 設楽 博己 1982「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号
 菅原 康夫 1988『日本の古代遺跡37 徳島』（保育社）
 菅原 康夫 1988「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」『同志社大学考古学シリーズ III 考古学と地域文化』
 田辺 昭三 1981『須恵器大成』（角川書店）
 藤口 健二 1986「朝鮮無文土器と弥生土器」『弥生文化の研究3 弥生土器I』（雄山閣）
 北條 芳隆 1995「徳島県における弥生の朱」『考古学ジャーナル』394
 松木 武彦 1989「弥生時代の石製武器の発達と地域性 - とくに打製石鏃について - 」『考古学研究』第35巻第4号
 三宅 良明 1996『第16回埋蔵文化財資料展「阿波を掘る」「阿波国府とその周辺」と最近の発掘調査』（徳島市教育委員会）
 三好昭一郎・高橋啓編 1994『図説徳島県の歴史（図説日本の歴史36）』河出書房新社
 柳瀬昭彦・伊藤晃ほか 1974「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2』（岡山県教育委員会）
 柳瀬昭彦ほか 1977『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』（岡山県教育委員会）
 家根 祥多 1996「縄文土器の終焉」『歴史発掘2 縄文土器出現』（講談社）
 湯浅 利彦 1994「弥生中期の土器と集落 - 阿波の現状と課題 - 」『弥生時代中期の土器と集落』古代学協会四国支部第8回大会資料（古代学協会四国支部）
 米田 敏幸 1991「土師器の編年 1近畿」『古墳時代の研究』第6巻（雄山閣）